

阿羅漢向・阿羅漢果

アチャン・マハー・ブーワ尊者の修行体験記

翻訳 : Paññādhika Sayalay



目次

皆様に気を付けて頂きたい事.....	3
私は” 仏陀” を念じる修習の仕方を選択した	7
その時から私の奮闘は始まり・・・	11
疼痛感とはただ感受の程度が不断に波動し揺らぐ自然現象に過ぎない	16
仏世尊は我々に教えられた	19
サマーディが如何に深く、また長時間保てたとしても・・・	24
もし、正しく修行するならば・・・	27
身体を思惟することの重要性.....	31
この説明を導きとして	34
総括してみるに・・・	37
総体的に、念頭（＝考え、発想）と想像の源泉は、行蘊と呼ばれる	43
心の観察の終り	50
一切は空である	52
阿羅漢果：法の震撼の内に落涙する	55
2002年5月2日アチャン・マハー・ブーフ尊者 89歳の開示.....	55
阿羅漢の証し：阿羅漢はなぜ泣くのか？	71
アチャン・マハー・ブーフ尊者 2002年6月17日の開示.....	71
付録：心——意識の知るといふ根本的特性	80
最も重要なのは心である	80
心の内在は光明であり清浄である	83
ひとたび心が十分に浄化されたならば・・・	85
なぜ我々は” 世俗” の心と” 絶対解脱” の心に分けるのか？	86

『阿羅漢向・阿羅漢果』 阿羅漢向：滅苦の正道
(アチャン・マハー・ブーフ尊者の修行体験記)

今日の仏教は、仏陀の教えが、言語文字のみ、残されている。また彼の教えは、経典として保存されている。

皆様に気を付けて頂きたい事

今日の仏教界は、煩惱の汚染の浸蝕を受けて、もはや、真正なる修行は残されていない、という事を。身は仏教徒でありながら、我々は、己の心を混乱と迷い・惑いの中に置き、煩惱の中に沈潜し続け、全方位的な苦痛の中に置いている。

これらの煩惱は、すでに我々の心の中を制服（＝制圧と降服。以下同様）しており、我々は、如何に努力しようとも、それらの影響を、振り払うことができないでいる。絶対多数の人間は、それに抗う意志さえも持たない：彼らはただ目を閉じて、煩惱が己を攻撃するのに身を任せ、それらに抵抗する為の、なんらの努力も払おうとはしない。心を観察する為の、念住に欠けている為、彼らの思想と一切の言語的行為は、すべて煩惱に覆われたものになっている。

長期にわたって、彼らは、墮落的な力の前に屈服し続けてきた為、今に至って、妄念を制服する動力に、欠けているのである。念住がないならば、煩惱は奔放に、やりたい放題に妄して、夜についで日についで、一切のレベルにおける行為に、影響を与える。この過程において、煩惱は、不断に、負荷と圧力を強め、人々の心に苦しみを齎している。

仏陀の時代、仏に従って出家した弟子は、仏教における真正なる修行者であって、彼らは、出来るだけ早く苦を超越する為に、世間を捨棄した。仏陀の膝下で出家し、教えを受けた後、それ以前の社会的地位、年齢、または性別如何にかかわらず、彼らは法に従って、古い思想と、行為と言動、習慣を、変えた。あれらの弟子たちは、その時から、煩惱を後ろに捨て去り、二度と煩惱に支配される事はなかった。彼らは、誠心誠意精進・修行をして、煩惱の汚染を解消し、心内を浄化した。本質的な表現をすれば、誠心誠意修行をするという意味は、修行者が、安定的に、念住と覚知を保持し、心念を不断に観察する事を言う。

我々の一切の姿勢と、すべての思惟と情緒・感情の活動において、念住によって、常に、覚知と省察が出来る時、これを ” 正精進 ” とする。我々が、正式の禅の修行を実践しているかどうかはともかく、誠心誠意、己自身の心を<今・ここ>に専注させる

時、煩惱が発する所の脅威を制止することができる。煩惱は、止まることを知らぬように、過去と未来の〈思い〉を創作し続けて、心を乱れせしめ、心を〈今・ここ〉から離れせしめ、修行を維持するに必要な、念住と覚知から、離れせしめる。

こうしたことから、禅の修行者は、心を過去と未来の俗念に向かい・漂わせてはならない。この種の妄念は、疑いもなく、煩惱にコントロールされ、修行の障碍になるが故に。禅の修行者は、(+己の心をして) 内部に向けせしめ、内心の世界を覚知しなければならない。煩惱の影響を受けて、外部に縁を求め、外部世界に注意力を向けるものではない。

これは非常に重要な点である。多くの禅の修行者が、満足できる成果を得ることができない主要な原因は、彼らの修行に対する基本的な原則が堅固でないが為である。私は通常、弟子に対して、非常に明確な、修行目標を擁するように、と指導する。禅の修行においては、明晰で具体的な專注点が必要であり、このようにして初めて、彼らは良好な成果を獲得することができる。

適切な專注の対象を一つ選択し、心を整えて、この類の仕事をするということは、非常に重要な事である。一般的に、私は入門的な念誦の詞を決め、それへの不断な持念によって、それを錨の一種とするのを推薦する。こうする事によって、禅修行者は、非常に早く入定することができる。もし、禅修行者がただ、〈今・ここ〉における知覚にだけ專注し、念誦詞をもって錨としないならば、修行の成果は、時には好く、時には悪いという風になる。これは、心の覚知(+力)が非常に微細なため、念住の強固な基礎とする事ができないためである。そうであれば、心は非常に早く、瞬間に煩惱に誘惑され、妄想と干渉の中に見失ってしまう事になる。

このようであれば、禅の修行は、一貫性を持たず、時には非常に順調でありながら、その後、突然に、何等の予兆もなく、前に進まなくなってしまう。そうなれば、修行全体としては、非常に不安定なものになり、目に見えていた進展は、跡形もなく消えてしまう。

この時、信心(=法への信頼)は打撃を受け、心は、不安の中に落ち込んでしまう。しかし、我々がもし、念誦の詞を利用して、念住を固定する錨とする事ができたならば、心は、最も短い時間内で、静かになって禅定を証することができ、また、このような方便によって、定の境も保持することができる。

私は自分の経験から、話しを始めようと思う。私が禅の修行を始めた時、私の修行は、基礎を欠いていた。その時はいまだ、己の心を守る正確な方法を見つけられていなかった為、私の修行は、フワフワとして、定まる事がなかった。それは、一定期間安定して

進展するものの、その後に徐々に減速して、まだ修行を始めていなかった最初のレベルにまで、後退してしまう。私が修行を始めた最初の頃、非常に奮闘努力した。その為、心はサマーディに静かに專注できるようになったが故に、まるで己自身が、不動の大山にでもなったような、感じがした。その当時、この境地を保持する為の、適切な方法を掌握していなかったのに、私は短慮にして、己の成功に慢心してしまったのである。こうして、私の修行は、後退の憂き目に会ってしまった。

修行は落ち込むばかりなのに、私はどのようにして、この状況を打開していいのか、分からなかった。その為に、私は非常に長い期間、苦難に満ちた探求を行いつつ、強固な基礎を打ち立てて、己の心を安定させたいと思った。最後に、私は結論を得た：念住が私から去って行くのは、基礎が間違っているからである——私には、念住を保持する為の、精確な專注点としての、念誦詞が欠けていたのである。

私は迫られるようにして、改めて修行を開始した。今回は、先に、一つのしっかりとした、礎になる杭を決めた。どのような事が起こっても、私はそれをしっかりと握りしめて、手放さないようにした。その杭とは ” 仏陀 ” —— 仏を憶念する事であった。私は念誦の詞として決めた ” 仏陀 ” を、唯一の專注の対象とし、私は、己自身の心内において、繰り返し ” 仏陀 ” と念ずる事を保持するように迫り、他の一切の事柄は、遠くへ排除した。

” 仏陀 ” は、私の唯一の禅修行の対象となり、同時に、念住を保持して、それが修行を引導するように (+心を) 保った。進歩だとか退歩だとかの考えは、すべて後ろに放り投げ、生起する事柄は、生起するままに任せた。私は、古い思惟のパターンの中に沈潜することのないように、決意を新たにした：過去を回想する——私の修行は、あれほど順調に進んでいた——このように崩れ去った(などを思惟しない)；未来を幻想し、強烈な願望でもって、成功に導かれるよう期待し、過去の満足感に浸るような事はしなかった。

これより先、私はただ只管、目標に到達する事だけを期待し、目標を実現するために条件を設定した後、それが実現しない故に失望を繰り返す、というようなことは、しなかった。実際、期待自体が成果を齎すという事はなく、ただ、念住を保持して修行する事だけが、成果を齎すのであった。今回、私はしっかりと、祈願した。

どのような事が起ころうとも、私は、それに振り回される事はない。進歩だの、退歩だのを心配する事は、ストレスの根源であり、それは、私をして、<今・ここ>と、眼前のなすべき仕事に、專注できなくさせるだけである。念住を保持して、” 仏陀 ” を繰り返し念誦する事によって、修行の浮き沈みを防止することができる。心を<今・こ

こ>の覚知に集中させる事は、今の私にとっての急務であり、私は二度と再び、妄想が私の禅修行を妨害するのを、許さなかった。

誠心誠意、一切の苦を滅し去るために実践する所の、禅修行において、あなたは、修行のそれぞれの段階ごとに、全身全霊をかけて、己を投入しなければならない。もし、あなたが、何らかの成就を得たいのであれば、己のすべてをかけて、それを実践せねばならず、些かの留保もあっては、ならないのである。最も高度なサマーディを体験し、最も深い智慧を証得しようとするならば、あなたは散漫であってはならないし、いい加減であつてもならない。もし、修行の原則をしっかりと捉まえる事ができないのならば、永遠にふわふわとして定まることがない。思い切りよく、修行に打ち込む事を決意しないのであれば、あなたは、一生涯をかけて修行したとしても、何等も得る事はないであろう。

始まりの段階において、一つの適切な禅修行の專注対象を選択するという事は、あなたの心の錨とすることができる。ただ、随意・気ままに、不鮮明な対象に專注してはならない・・・たとえば、心内に存在しつづける覚知などを、対象としてはならないのである。特定の專注の対象（+を定める事）によって、あなたが、あなたの心を止め置くことがないならば、あなたは、あなたの心が、外に向かって漂い出すのを、止めることはできない。これが失敗の禍根である。最後には、あなたは失望によって、修行を放棄してしまうであろう。

念住は、一たび焦点を失うや否や、煩惱は突進・進入して来て、あなたの心をば、遙か昔に連れ去るか、または、未だ来ていない将来に、連れ去ってしまう。その時、心は安定しなくなり、目標を見失って、妄想・夢境に揺蕩ってしまい、いつまでも知足する事ができず、安住する事もできなくなってしまう。これは、修行者が、己の修行の崩壊の様子を、手をこまねいてみているより仕方がない状況である、と言える。

唯一の対治の方法は、一つの簡単な、專注できる中心的対象、たとえば、念誦する詞とか、呼吸などであるが、それらの中から、己に合うものを一つ選択して、その後は、あらゆる事柄、一切を排除し、この対象に動揺することなく、断固として專注するのがよい。

重要な事は、あなたは全身全霊をもって、全力を尽くして、修行する事である。たとえば、あなたが呼吸をば、專注の対象として選択したならば、一回の呼気と一回の吸気の度に、完全にそれを覚知し、呼吸が（+鼻の前）を通る時に生じる感覚に注意して、その後、己の注意力を、その呼吸が最も明確に感じられる場所、たとえば、鼻先等に、意識を集中させる。

あなたは、己がいつ呼気し、いつ吸気しているのかの自覚を確保するが、しかし、呼吸の過程に注意を払ってはならない——ただ、呼吸が通る所の、その通過点に対して、專注するのである。もし、あなたにとって、助けになると思えるならば、呼吸と、” 仏陀” という詞を何度も繰り返して黙念する修行方式を、結合させてもよい。呼気する時、” 仏陀” と黙念し、吸気する時、” 仏陀” と黙念する。妄想に、あなたの修行を妨げさせないようにする。これは<今・ここ>の修行であり、故にあなたは、覚醒と、完全なる專注を、保持しなければならない。

念住が徐々に確立された後、心は二度と、有害な考えや情緒に、惑わされる事がなくなる。それは、直前の妄想に興味を失い、妄想からの干渉を受けないで、一步また一步と、安寧と静けさの中において安定する。同時に、呼吸——修習の最初にはそれは粗いものであるが——ゆっくりと微細に変化していき、最後にはあまりに微細な為に、あなたの意識の中で消失してしまう。それは微細になり、淡くなって消失してしまうのだが、この時、呼吸は止まってしまい——ただ、意識が知っている所の、根本的な特性のみが残る。

私は” 仏陀” を念じる修習の仕方を選択した

私は、祈願したその一刻以降、私は私の心をして、” 仏陀” という詞を繰り返し持し念じて、心を ” 仏陀” から離れさせないようにする事を、決意した。早朝、目を覚まして、夜寝るまでの間、私は己自身に、ただ只管 ” 仏陀” を憶念する事だけを、強要した。同時に私は、進歩だの、退歩だのという、思考パターンを放棄した；もし、私の禅修行が進歩するならば、それは ” 仏陀” と共に進歩し；もし、退歩するのであれば、それは ” 仏陀” と共に退歩する。状況がどのようなあっても、” 仏陀” は私の唯一の專注の対象であり、その他の一切の事柄は、私には関係がなかった。

このように、一心に專注する事は、決して簡単な事ではない。一刻また一刻と、私は、己の心が干渉を受けずに、” 仏陀” に安住し続けるよう、確乎として己自身に要求し、座禅・瞑想の時も、経行する時も、また、日常の雑務の内にも、” 仏陀” というこの念誦の詞は、私の心内の深い所において常に共鳴し続けた。私の心意気と性格は、確乎として堅持することと、妥協しないことであった。この種の性格は、私に好都合であった。私はそれほどに敬虔に、全身全霊をこめて修行に没入し、どこからかやって来る動揺も、一切受け入れない事を決意した。最後の段階になると、いかなる妄想も、私の心と ” 仏陀” を分け隔てる事が、できないようになったのである。

私は、毎日このように修行し、“仏陀” をして、始終<今・ここ>の覚知と調和せしめ、共鳴せしめるようにした。瞬く間に、私は安寧、静けさ、定が、心から——（+すなわち）意識が知っている所の根本的特性——の中から生起する事象を、見る事が出来るようになった。この段階において、私は、心の非常に微細で精妙なる本質を見始めたが、私が益々 “仏陀” を内在化させればさせる程、心は益々細微になり、最後には “仏陀” の微細と、心の微細が、お互いに融合し合っって一体化し、それは能知（＝知る者。以下同様）の核心となった。

私は “仏陀” を、心の微細な本質と分け隔てる事ができなくて、どのように試してみても、私は “仏陀” という詞を、心の中に出現させる事ができなかった。一所懸命に努力した為に、“仏陀” という詞は、それほど深く私の心に合一し、その為に “仏陀” 自体は、私の覚知の中に出現する事がなくなったのである。心はそれほど、安寧で静かで定まっておき、それほど微細であり、まったく何もなくならば、“仏陀” できえも、ここにおいて共鳴した。

この禪の修行の境地は、上で述べた、呼吸が消失する所の境地と、同じ様であった。この種の状況が発生すると、私はどのようにすれば良いのか、分からなくなった。これより以前、私は修行の過程全体において、しっかりと “仏陀” を保持してさえいれば、よいのだと思っていたのだが、今では “仏陀” は出現せず、私は、何に専注すればよいのか分からなくなってしまったのである。それは、消失してしまった。

私はどのようにか努力して、この專注点を見つけ出そうとしたものの、どうしても見つける事ができず、私は困惑の中に落ち込んだ。残されたものは、心の微細な能知の特性であり、一つの純潔な自然な覚知であり、光明・明晰さであり、この覚知の内においては、縁の対象とする事のできる、何等の実体のあるものはなかった。私は意識——知っている（+ことそのもの）——それほどまでに高度で深くまた、微細である所の境地に到達したならば、どのようなものも、心の覚知の領域に進入する事はできないことを、察知した。

私に残された唯一の選択：“仏陀” を見失ってしまった為に、私は己の注意力を、<今・ここ>において、どこにもあつて、存在しない所のない明確な覚知の上に、置くより方法はなかった。意識は消失していない——否——それは一切に浸透していた。その直前に “仏陀” に專注していた覚知は、いまではしっかりと、この安寧と静けさが集中する所の心の中の、極めて微細な覚知の上にあった。私の注意力は安定的に、この微細な能知の核心の内に留まり続けた——それが徐々に、もはや顕著でなくなって、

正常な意識が回復するまで、続いたのである。正常な意識が戻るや否や、“仏陀” はまた再び顕現し、私はすばやく、再びこの念誦詞を持し念じることに転じた。

久しからずして、私の日常の修行は新しい段階に入った：私は “仏陀” に専注して、意識が心の能知の特性の中に進入すると、一つの明晰な、光明なる境地に到達し、次に、私は、この微細な覚知を全力で専注したが、それは、その後に正常な意識が回復するまで続いた。その後に、私は更に “仏陀” を持し念ずることを繰り返す修行に精進した。

私の禅修行は、この段階において初めて、安定した修行の基礎を、打ち立てる事ができた。この時以来、私の修行は安定的に進歩し——その後、後退する事はなかった。一日過ぎる毎に、私の心は更に安寧と静けさ、平和と集中の度合いを、増していった。以前より私を悩ませ続けた、修行の浮き沈みによる変動は、跡形もなく消え失せた。修行が前進するかどうかの懸念は、＜今・ここ＞の念住によって取り換えられた。＜今・ここ＞の念住の力と、過去と未来を妄想する妄念は、全く持って比較する事も無駄であった。私の生きる中心は、＜今・ここ＞において——繰り返して念じられる “仏陀” の黙念の生起と消滅だけとなり、私は、他の一切の事柄に、興味を持つことはなくなった。

遂に私は、過去において、修行に乱れがあったのは、念住を実践する時に、念誦詞という錨に欠けていたためである事を、はっきりと確信した。以前の私には、禅修行における、専門的に特化した対象がなく、ただただ、内在する覚知という、おおざっぱな感覚に対して、専注していただけなのであり、故に、妄想が侵入するやいなや、簡単に征服されていたのである。私は一たび、禅の修行の初期段階における正確な方法を知ってから後、誠心誠意、修行に打ち込み、一瞬の失念も、己に許すことはなかった。早朝目が覚めてから後、夜眠るまでの間、私は時々刻々、目覚めた心で修行した。

これは一つの、非常に厳格なテストであり、比類なき専注と精進が必要とされた為、私は、念住に毛筋一本程のゆるみも出ないよう、精進した。それほどまでに “仏陀” に、深く専心した為、私は、己の身の出来事に、全く留意する事はなかった。日常生活は、何とはなく過ぎて行ったが、しかし、“仏陀” だけは、はっきりと、専注し続けた。私における、念誦詞に対する決意は絶対的であり、この堅固とした基礎は、私の修行を支えてくれ、心の安寧と静けさ、集中力は、全くもって動揺する事はなくなり、それは、大山のように、安定して強大になった。

徐々に、この磐石なる心が、念住の主要な專注の対象となっていく。心が段々に、心内の安定を得るに従って高度の合一を形成すると、念誦の詞である ” 仏陀 ” は、徐々に知覚から淡くなって行き、残るのは、心の持つ、知るといふ根本的特性が、安寧と静けさ、定の状況の下において、己自身を突出することによって、覚知されるのであった。この段階においては、心はサマーディに入る——それは、一つの高度な專注の覚知であり、独自に出現するものであるが、この状況は、如何なる禅修の技巧とも、無関係であった。

この時の、心の境地は、完全に安寧と静けさと合一であり、能知（＝知る者。以下同様）は顕現して、唯一の專注の対象となったが、それは非常に顕著で、力のあるものであり、それは何かと、とって代ることなど、できないものであった。これは、心がサマーディの境地を維持している為であると言えるが、言い換えれば、心はすなわちサマーディであった——両者は、合一して、一つになったのである。

さらなる高く深い禅修の境地について言えば、定の境地とサマーディの境地には、一つの根本的な違いがあった。心は、ひとたび集中して、安寧と静けさ、定の境地の中に一定時間落ち込んだその後に、正常な意識状態に戻る訳であるが、これを定の境と言う。その静けさと定は、心がこの定の境地の中にいる間だけ、暫定的に維持される。心が通常の状態に戻ると、この特殊な境地は、徐々に消えていく。

しかし、禅修行者がますます修行に熟練していく——一回また一回と、この安寧で静かな、定の境地に出たり入ったりしていると——心は、強固な内的基礎を打ち立てる。この基礎が、如何なる場面においても動揺しないようになれば、心はサマーディを継続して維持しえる境地に入った、と言われる。この時、心が、この定の境地から退出したとしても、それは依然として、強固で緊密であるという感覚を保ち、どのようなものをもってしても、その内在する所の焦点を、乱すことができないようになる。

持続的にサマーディに集中している心は、平等と不動揺を保持するが、それは徹底的な充実を感じせしめる。これは、内在における結合が、ある種の非常になる緊密的な集中を有するという感覚があるからであるが、日常の思想（＝思い）と感情は、二度と攻撃を齎す事はなかった。この境地において、心は、二度と、どのような妄想も、する事はなかった。それは己自身において、徹底的に静かで満足しており、何物も欠ける事がなかった。

安寧と静けさと、定の境地が持続される所の境地において、心は非常に力のあるものに変化した。その以前において、それが渴望した思想（＝思い、考え）と感情は、現在では、嫌悪なる事柄と見做して、それを回避したし、以前においては、思考と想像を停止する為、煩悩（＝ストレス）が起したものであるけれども、現在においては、サマ

一ディが慣性となった為に、それは何事かを思考したいという興味・趣向がわき起こることはなく、それは念頭（＝思いつき、考え）をば、（＋己にとって）歓迎されない所の干渉であると見做した。

意識の、知るという主要な特性が、それほどまでに鮮明であり続ける時、心は極度に、内に向かって專注し、何等の干渉も受け入れる事が耐え難いものとなる。この甚だ深い安寧と静けさ——及びサマーディが心をして、平静にさせて、安らいだ満足の方向へと進ませる——あれら持続的なサマーディを証得した人は、この境地を強烈に執着する傾向を持つようになる。禅者は、長くこの段階にとどまるが、智慧がそれを超越した後において、効果は更によくなるのである。



その時から私の奮闘は始まり・・・

そして、その頃から、私は夜通し、すなわち、夕方から明け方まで、座禅・瞑想するようになった。ある日の夜、私はいつもの通り、己の内部に向けて專注していた所、それ（＝心）がすでに良好な、また、堅固な基礎を打ち立ててあったのが原因で、心は、軽々とサマーディに入って行った。

心は、定の中で休んでいさえすれば、外部にある身体的感受を覚知する事はないが、私が数時間の定の中から退出した後は、それを十分に覚知する事はできた。暫くして、私の身体は、忍従しがたいほどの、激痛を覚えるようになった。心は突然、力を失い、あの良好で堅固であった基礎は崩れ去り、身体全体は痛みの為に、小刻みな震えが、やって来た。

結果、これより先、暫くは肉弾戦となったが、最後に私は、禅の修行における重要な技巧を発見する事となった。思いがけず、激痛を発症したあの夜より以前、私は夜通し座禅・瞑想しようとは思わなかったし、そのような祈願もたてたことはなかった。私は

ただ、通常と同じように、座禅・瞑想したかっただけであったが、しかし、身体の激痛に溺れそうになった時、私は思った：

「えっ、一体何が起こったのか？私は一晩かけて、この痛みとは何かを探求してみよう」私は一つの大きな祈願をした。たとえ何事が発生しようとも、私は夜が明けるまで、決して座禅・瞑想を止めはしない、と。私は、激痛の本質とは何かを点検し、その本質を理解しようと決意した。私は深くそれらを掘り下げたいと思った。もし、必要があるのであれば、私はこの激痛の真相を見つけ出す為に、命を投げ出してもよい、と思った。智慧が、この問題に応答してくれた。

これより以前、私は激痛の為に、己の退路が断たれたと感じていたが、智慧というものが、それほど鋭利である事には、思いもよらなかったのである。ひとたび私が（+座禅・瞑想を継続する事を）始めると、智慧は、決して諦めない、投降しない戦士のように、決して休むことなく、激痛の根源に向かって、探査を繰り返したのである。今回の経験から、私は深く信じるようになった・・・真正なる危機に出会った時、智慧は身を呈して、前面に出て来て、挑戦してくれる事を——我々は、定まった運命の中で、永遠に愚かで無知である必要はない——真正に危機が極った時、我々には、解決の方法を見つけ出す能力がある。

あの日の夜、この状況が、私の身の上で起きた。激痛に溺れて、絶望の境地に入りかけた時、念住と智慧が、痛みの中に分け入ったのである。痛みの始まりにおいて、私の手と足と背中の疼痛は、電気で焼かれているようであったが、しかし、これはまだ、ただの序の口に過ぎなかった。疼痛が極点にまで到達した時、四肢百骸は、燃え盛る火の中に放り込まれたように痛んだ。すべての骨、すべての関節は、燃料を撒かれた、燃え盛る火に飲み込まれたようであった。

身体の骨の一本一本は、皆砕かれて、粉々になったようであった。私の首の骨は折れてしまって、私の頭は、地面に落ちたかと思った。身体のあらゆる部分において、同時に激痛に襲われ、余りの痛さに、息もできないくらいであった。危機において、念住と智慧も無策であったが、私は、痛みの根源に深く潜り込み、最も強烈に痛む部分を探し出した。念住と智慧は、痛みの最も激しい部分を探り、観察して、それを隔離した後、しっかりとこれを観察したいと思った。

”この痛みの根源はどこにあるのだろうか？誰がこの痛みを受け入れているのだろうか？”

彼らは、一つ一つの痛む部位に対して、この問題を問いかけた所、一つ一つの部位には、ただ、それら自身の特徴が存在しているに過ぎない事が、分かった。皮膚は皮膚、

筋肉は筋肉、腱は腱、以下類推すれば同様であって、（＋私が）出生して以来、かれらはかれらそのままであったのである。また別の角度から見ると、痛みはある種の時間帯において、行ったり来たりしており、筋肉や皮膚のように、そこにじっとしているという事は、なかった。通常、痛みと身体はほぼ一体であるはずであるのに、しかし、真実は異なるようであった。

内に向かって專注すると、私は身体のそれぞれの部位は、真実の物体である事を確認することができる。真実、そこに存在している。私が、身体内部の一塊の痛みを探するとき、ある一点では、他の場所より痛みが強烈であることが分かった。もし、痛みと身体が一体であるならば、そして、身体の各部位は同様に真実であるならば、どうしてある部位の痛みは、その他の部位より、なお強烈に痛いのであるか？私は一つ一つの部位を分解して、隔離する事にした。

観察していると、念住と智慧はお互いに分離できないものであって、それらは痛みの部位をスキャンすると同時に、最も激烈な痛みの部位に至っては旋回し、不断に、感受を身体から分離して、引き離れた。（＋念住と智慧は）身体を観察した後、快速に疼痛に注目する為に転移して行き、その次（＋に観察の対象になったの）は、心であった。この三種：身体、疼痛と心が、主要な観察の対象となったのである。身体の疼痛は激烈ではあったが、私は、心は静かであって、（＋疼痛の）影響を受けない事に気が付いた。身体がどのような強烈は不具合に遭遇しようとも、心は決して干渉を受けないし、心が折れる事もなかった。この事は、私の興味を引き起した。通常、煩悩は疼痛と結合して、その後、この結合体は、心をして、身体の疼痛と混乱を受領せしめるのである。

この事は、智慧による、身体の本性、疼痛の本性、心の本性への探索を引き起したが、それは、三者が異なる真実であるという事が、はっきりと分かるまで続いた。一つ一つの真実は、各自各々の領域を持っていたのである。私ははっきりと見た。心は、感受に、疼痛と不快感という定義を与える。そうでなければ、疼痛はただ一種の自然現象に過ぎず、それは身体の一部ではなく、心の中にあるのでもない。この道理が明らかに鮮明になった時、疼痛は瞬時にして消失した。その時、身体はただの身体——そのこと自体（＝三者）は、分離した真実であったのである。

疼痛はただの感受であり、一瞬に感受した後、心から消えてしまう。疼痛が心から消えてしまうと同時に、心は、疼痛がすでに消え去った事を知るが、その消失という事柄は、何等の痕跡も、残さないものであった。色身が、覚知から消え去った。あの時、私は身体に対して、完全に意識を向けていなかったが、単純な調和と覚知のみが、そこに独自に存在していた。ただそれだけであった。心は精緻で微細で、その程度は、形容し

がたいほどであるが、それはただ、知っている——一つの内在する所の非常に精緻な覚知が、（+全身に）満ち満ちている事を。

身体は完全に消失した。色身はそこに座り続けてはいたものの、しかし、私は全くそれを意識する事はなかった。疼痛も消え去り、身体感覚もなかった。ただ心の、知るという、根本的な特性のみが、存在していて、あらゆる思想、考えが停止して、意識においては、ただ一つの念頭（=考え、発想）さえも、生起することはなかった。思想（=考え）が停止した時、最も微細な毛筋ほどの波動もなく、内在する平静は、干渉を受けず、心は、不動揺のまま、何等の揺るぎもなく、独自に存在していたのである。

念住と智慧の力は、あの、火で焼かれるような強烈な身体の疼痛を、完全に消失させた上、私の身体をもまた、意識から消え去らしめた。能知（=知る者）は、独自に存在しており、それはまるで空中に浮いているようであり、それは全き空であり、しかしまた同時に、活力が充満する覚知でもあった。身体の元素が、それ（=能知）とは影響し合わないため、心は、身体の存在を、もはや感受することはない。この能知は、ただ単純に独立した覚知であり、その他のあらゆる物事・事柄とは関係がない。それは人をして、敬服、畏怖せしめ、偉大であり、実在する荘厳であった。

これは一つの、不可思議な、人をして驚かす所の経験であった。疼痛は完全に消失し、唯一残ったのは、あの精緻で微妙な、名状しがたい覚知であり、私が言える事は、それが存在している、ということだけである。これは一つの、人をして感嘆せしめる所の、内在的な境地である。

心の内側には活動がない——最も微細な波動さえもなく、それは完全にこの定の境地に滲み込んで、十分な時間が過ぎた後になって、サマーディから退出する時になって初めて波動する・・・すなわち波打つのであるが、それは密やかに波動し、波打った後、再び静かに静止してしまう。この波動は、自動的であり、また自発的である。波動を故意に起こす事はできず、どのような作意も、心をば、通常意識状態に、戻してしまうのである。心が、定の中に滲み込んで、十分に長い時間が経った後、それは波動、すなわち波打つ事を始めるが、それは、波動が短時間に揺らいだ事を知った後、また再び、静かになってしまう。暫くすると、それはまた短時間波動し、かつ同時に消失する。徐々に、波動の起こる回数は、ますます頻繁になって行く。

心が集中して、サマーディの根本に定まる時、それは、一気に退出するという事は無いが、この事は、私にとっては、非常に明確な事であった。心は、少しばかり波動し、揺らぐが、その意味は、行（sankhāra）が短時間形成され、いまだはっきりと認定される前に、消え去るという事である。波動を起すや否や消える・・・一回また一回と、

波動は揺らいでは、消失する。そして、その後において、徐々に回数を増やして行き、最後になって、心は、徐々に、平常の意識へと、戻って来るのである。そうして、私は、身体を意識するようになったが、しかし、疼痛はすでに跡形もなく消失していて、（＝退出の）初めには完全に疼痛はなく、それ（＝疼痛）は、ゆっくりと戻ってきたのである。

今回の経験は、動揺する事のない、証悟による確信を齎し、私は、心内における堅実な修行の基礎を強化した。私は、疼痛と戦う基礎的な道理についての覚醒を得た：疼痛、身体と心の全体は、それぞれが、明確に分離された現象ではあるが、しかし、一つの心理的汚染——無明——が原因で、それらは合して一体になる事を。無明は、無色透明、味のない毒薬が心内に滲み込んだようなもので、我々の認識を汚し、かつ事実を歪曲するものである。疼痛はただ、自然発生的な自然現象でありながら、我々は、それが燃焼による痛苦であると思い込んで、きつく握りしめる・・・そして、そう思えば、それは熱く燃焼する——というのも、我々の定義自体が、それを熱く燃焼させるが故に。暫くすると、痛みが戻ってきた。

私は再び、それと対応するために、疼痛の感受に深く沈潜して、探索を開始しなければならなかった。ちょうど直前に、私がそれを観察していた様に。しかし、今回は、先ほどと同様の技巧を使って、観察することはできない。それがいかに有効な効果を齎すにしても。その理由は、それ以前に使用した技巧と、＜今・ここ＞における現況が、相応しないが故である。

内部に浮かび上がる状態（＋の観察）に後れを取らない為には、私は＜今・ここ＞のある眼前の進展に対応しなければならず、それは念住と智慧によって、新しい技巧を設定することを意味した。疼痛の本質は常に変わらない。しかし、技巧は＜今・ここ＞の状況に対応しなければならない。以前において、その技巧が、すでに成功裏に応用できたからといって、その古い技巧でもって、新しい状況に対応することはできないのである。

＜今・ここ＞における、戦うべき激痛のレベルに沿って、以前とは異なった、新しい技巧を創設しなければならない。念住と智慧は、改めて仕事を開始した。暫くして、心はまた、サマーディの根本へと集中して行った。この夜の修行において、心はこのようにして、三度定に入った。毎回、私は自ら奮闘努力しなければならなかった。三回目が終わる頃、夜が明けた。決定的な意義を持つ格闘は、ここにおいて幕を閉じた。心は、勇猛で、活発で、絶対的な無畏を顕現した。あの夜、死への恐惧が、消失した。

疼痛感とはただ感受の程度が不断に波動し揺らぐ自然現象に過ぎない

我々がそれを、己個人が背負い込み、己自身の負担にしないならば、それは心にとって、特別な意味を持たない。疼痛自体、その本質は、何等の意味も意義をも、もっておらず、心に影響を与えることはない；色身もまた、その本質において、何等の意味も意義も持たない。それは感受に対して、または個人に対して、何等かの意義や意味を齎す事はない——当然なことながら、心が介入して、特殊な意義や意味を添加し、添加する事によって生じた苦でもって、己自身を焼こう等とは、しないならば。

外部に存在する因と縁は、我々に苦を創造したり、苦を齎したりする事はないが、それを、心が造り出すのである。朝起きて、私は言葉では言い表せない程の勇猛さと大胆さを感じ、己自身の非凡な経験に驚嘆した。私の修行において、これと比較できるような体験は、これまでにした事がなかった。

心は、どのような関心をも引き起す関係性を、徹底的に断じ除いて、真正なる勇氣でもって、内部に向かって、凝集して行ったのである。私の全面的な、辛苦の観察を通して、それは集中する事によって、荘嚴なる定になった。それが退出したとしても、今なお勇氣が充満し、死ぬことに対して、無畏となった。今私は、正しい観察の技巧を知った。故に、私は次回、再び疼痛に出会ったとしても、恐れないであろう事を、知っている。

畢竟、疼痛は同様の性質を保持し、色身もまた同じ色身であり、私が応用する所の道具もまた同じ、智慧であった。故に、私には、疼痛を恐れず、死ぬことを恐れないという気持ちが現前したのである。ひとたび、智慧が、何が死亡して、何が死亡しないのかという真正なる本質に覚醒したならば、死ぬ事は、かくも平凡な事柄になったのである。

頭髮、爪、齒、皮膚、筋肉、骨：これらのものが、それらの原本である本質に戻ったならば、それらはただ地大にすぎない事が分かる。地大は、これまで、死んだ事があるだろうか？それらは分解されるとき、一体何になるのであろうか？身体のすべての部分は、元々の元素に戻る。地大と水大は、それらの本来の属性に戻って行き、風大と火大もまた同様であって、消滅させられるものは、なにも無い。

これらの元素は、聚合して躯体になり、心はその内において、安住する。心——この幻想の大師——は、躯体に駐み込んで、その後それに生命を吹き込み、次には、それをもって自我を形成する。そして、その結果、我々は、大きな風呂敷、大きな負担を背負い込む、という訳である：

”これは私、これは私のもの”心は、その全体を己自身に所有されるものとするが、この錯覚によって、己自身に対して、無尽の灼熱する苦痛を齎すのである。心自体が、真正なる首魁であり、禍の元であって、あの一塊の物質元素は無関係である。身体は、

不断に波動し揺らぎ続けているものの、我々の安寧に脅威を与える敵ではない。それは一つの独立した真実であり、ただ、内在する因と縁に従って、自然に変化しているだけである。唯一、我々がそれへの認識を間違えた時にのみ、それは己の負担となる。これがまさに、我々がなぜ、身体の疼痛と不快によって、苦を受けるのかという答えである。

色身は、我々に苦を受けさせたり、苦を齎させたりはしないが、我々は、己自ら進んで、苦を受けているのである。このことから、我々は、外部の因と縁は、我々に苦を齎せ得ない事が分かる。我々自身が、物事への錯誤した認識を持ち、その誤認が痛苦の炎を齎し、我々の心を燃やすのである。私ははっきりと悟った。死ぬものはなにもない事を。心は絶対に死なないだけでなく、実際には、それは更に明晰になる。もし我々が、さらに全面的に四大を観察し、それらを分解して、それらを、それらの元々の属性に戻してやれば、心は更に突出して明確、明晰化する。どこにおいて死亡が見つかるのか？何が死亡するのか？

四大——地、水、火、風——それらは死なない。心に至っては、それが死ぬことなど、あるはずもない。それは更に明確、明晰になり、覚知と洞察力を持つ。この、知るといふ根本的特性は、決して、死ぬことが無い。そうであるのに、なぜそれほど、死を恐れるのか？己自身が己自身を騙している、それだけである。無量の劫以来、それは絶え間なく己自身を愚弄して、死が存在すると信じているが、実際には、死ぬものなど、一つもありはしないのである。

故に、疼痛が身体において生起した時、我々はそれはただの感受であり、その他の何物でもない事を理解しなければならない。自我の観点からそれを定義してはならず、己自身の身体に発生してもいない事柄を仮設してはいけない。出生よりこのかた、疼痛はあなたの身体を苦しめている。あなたが母親の子宮から出て来る時の、あの疼痛はあれほど鋭く、この苦しみを通してしか、人類は生まれることができない。

疼痛は、人生の初めからそこにあるもので、それは、何ほどか回心して、その特徴を変更したりする事はない。身体の疼痛は、永遠に同様の性質を持ち続けている：生起して、非常に短い時間留まって、滅し去り・・・生起して、非常に短い時間留まって、滅し去り——ただ、これだけの事なのである。

身体に生じる疼痛の感覚を観察して、それらが何であるかを見極める事。身体はただの物質にすぎず、我々が出生して以来、知っている所の物質の真実に過ぎない。しかし、あなたがあなたの身体に信頼を寄せ、一たびあなたの身体に傷害を受ける時、あなたは疼痛を（+必要以上に）感じ取ってしまう。身体、疼痛と認知というこれらの覚知が、

同時、同等に生起される時、それらは一体化して、一つに合成される。生理的な疼痛は、身体機能の不調によって生じるが、それは身体の何らかの状況によって生じるものであって、それ自体は物質的な現象ではない。

身体と感受を覚知する為には、それらを知ることでできる心に依存しなければならない。しかし、それらに対する認知が不正確な場合、生理的な欠陥と疼痛の激烈さによって、心内に苦受が生まれる。疼痛は傷害を齎すだけでなく、また、あなた——あなたの身体に問題がある事を現わしている。あなたが、この三種類の明確な事実を分ける事ができないのであれば、生理的な疼痛は、必然的に心理的な苦を齎すのである。

身体はただの物質現象に過ぎず、我々がそれをどのように見做そうとしても、この実相の根本的真理が変わる事はない。物質的存在は一つの真実であり、四大の属性——地水火風——は、異なった組み合わせによって、一つに聚合して、いわゆる”人”になる。この物質の聚合体は、男性であるとされたり、女性であるとされたりし、また名前を付けられたり、社会的地位を付与されるが、しかし、その本質においては、ただの色蘊——物質の聚合に過ぎないのである。聚合によって一つになり、すべての器官は人体を構成するが、これは一つの明確な物質の真実である。

また、一つ一つの部分は、全体の基本的な真実の一部であり、四大は異なった形式によって、一か所において聚合するが、人体においては、我々は皮膚であるとか、筋肉であるとか、腱、骨であるとか呼称する。しかし、それらが異なる名前を有しているからと言って、それらに異なった真実があるなどという愚かと無知に埋没してはならない。それらは一つの根本的真理——色蘊と見做さなければならないのである。

受蘊に関しては、それらは、それら自身の領域に存在しており、それらは、物質的身体の一部ではない。身体と同様に、それらは感受ではなく、身体の疼痛の中において、それが直接作用する事はない。この二つの蘊——身体と感受——を比べてみると、行と識蘊が比較的明確である。これは、後三者は、生起した後、即刻消滅する為、前二者に比べて、観察しにくいからである。相対的に、感受は、滅し去るその直前に、非常に短い時間そこに留まるが、これがそれらを出させる原因であり、その為、それらは、禪の修行の時に、容易に分離することができるのである。

疼痛感が生起する時、直接それらに専注し、かつ、なるべくそれらの本質を理解する事。挑戦されたら、しっかりとそれに挑み、注意力をその他の部分に移動させて、疼痛から逃避してはならない。また同時に、疼痛を滅し去りたい、という願望の誘惑に、抵抗しなければならない。観察する唯一の目的は、真正なる理解を得る事であって、疼痛

の解除は、真相をはっきりと理解した事から生じる副産物に過ぎず、これを主要な目的としてはならない。

このようにすると、もし、疼痛が緩まらない場合、更に大きな感情的な傷害が齎される事がある。激痛と対面している時、抑圧や忍耐は、成功を齎さない。身体と心を外側に向かって排除し、疼痛に一心に專注するのによくない。正しい成果を得るためには、三種類の、すべての要素が含まれていなければならない。観察においては、直接的で、かつ、明確な目標がなくてはならないのである。

仏世尊は我々に教えられた

仏世尊の教えられた、観察の目的とは何か？すべての疼痛は、生起して、非常に短い時間留まって後、滅し去るという現象を、よく見る様にと教えたのである。その中に分け入って、干渉してはならない。自我（＝エゴ）でもって、疼痛を己の不可分の一部分として観察してはならない。そのようにする事は、疼痛の真正なる本性から離脱しており、また同時に、疼痛を観察する技巧を破壊する事にもなり、また、感受の真相を理解する智慧の生起を、阻害する事にもなるが故に。無の中から有を作り出して、問題を複雑にしてはいけない。疼痛が生起する所の真相を観察し、それが非常に短い時間留まって後、滅し去るのを観察し、それが疼痛のすべてである事を（+観察しなければならない。）

あなたは念住と智慧でもって、疼痛の感受を分離した後、注意力を心に集中させ、感受とそれを知ることのできる覚知を比較して、それらを分離できないかどうか試してみる。同様の方式を用いて、心と色身を比較して、それらが同等であるかどうか、観察してみる。はっきりと、明晰に、その一つ一つに專注すべきであって、注意力を、あなたが狙いを定めた観察の対象から逸らしてはならず、その側面にしっかりと、專注しなければならない。たとえば、注意力を疼痛に專注せしめて、かつ、その明確な特徴を、あなたがはっきりと理解するまで観察を続け、その後、心の観察へと転換・移行して、なるべく深く、その能知（＝知る能力、知る者）の特徴を、観察する。両者は同じものであろうか？

それらを比較してみるに、感受と能知の覚知は、同じものであろうか？

それらが、そうあるようにする方法を、我々はもっているであろうか？

身体、それは心と同じ特徴を、持っているであろうか？それは感受のようであろうか？

この三者は、似たもの同士として、一体に合することができるであろうか？

身体は物質である——なぜ、心と同じであり得るか？

心は心理現象であり、能知の覚知である。身体を構成する物質元素は、内在する覚知を持たず、知するという能力を、持たない。地、水、火、風大は何も知らないが、唯一、心の元素——意界のみが——能知なのである。このような状況の下、心の、知するという根本的な特徴と、身体の物質元素の、どこが同等であり得ようか？非常に明確に、それらは異なった真実に属しているのである。

疼痛も同じ道理であって、それは内在する覚知を持たない。知（＝知る事そのもの）の能力を持たないのである。疼痛は、身体に関連して生起する所の自然現象であるが、しかし、それは身体または己自身の存在を意識する事はない。疼痛の感受は、身体に依存して住み、身体がなければ、それは存在することができない。とはいえ、それら自体は、物質的真実を持たないのである。身体に付随して生起する所の感受をば、身体の疼痛の分離できない一部分として定義してしまうと、我々は本能的に、身体と疼痛をば、同等のものと見做してしまい、その結果、身体が、傷害を受けたように思ってしまう。我々は、感受の現象としての疼痛の本質と、身体が激烈に痛む部位の物質的本質を観察して、己の直覚的（＝無意識的）反応を、糺さなければならない。

このように修習する目的は、物質の部位——例えば膝関節——は疼痛と関連する顕著な特徴を顕現していないかどうか、それらはどのような形状と姿勢を擁しているか等、明晰に確定する事にある。感受には、形状も、姿勢というものもない。それらはただ、形状のない感受として発生する。身体は明確な形状であり、色彩であり、気色であるが、これらは、生理的な感受に従って発生したり、変化したりはせず、それらは、疼痛が発生する以前の原状を維持している。物質の存在は、疼痛によって変化する事はない。というのも、疼痛は（＋身体とは）異なる別の真実であり、それに対して、直接の影響を及ぼす事はないのである。

例を挙げてみよう。膝頭または筋肉に怪我をしても、膝頭または筋肉はただ骨、靭帯と肉に過ぎず、それらは疼痛自体ではない。両者は共にあるけれども、それらはただ各々の特性を、保持しているだけである。心はこの両者を知っているが、しかし、その覚知が、無明によって覆い隠されている為に、自動的に、疼痛と、膝頭を構成する所の膝の関節の骨、靭帯、肉は、疼痛と一体化した、結合したものだと仮設（＝仮に設定する）する。同じく無明のために、心は、身体の各部分は、みな己の一部分だと仮設するために、その結果、疼痛もまた、自我の感覚と結びついて、束縛されているという感覚が生じてしまう。

“私の膝頭は、怪我をした。私は、痛みの中にある。私は、疼痛などいらぬ。私は、疼痛に消失して欲しいのだ。”疼痛を駆逐したいという思いは煩悩であり、それは、生

理的な疼痛を、心理的・感情的な苦に変えてしまい、そのことによって、更に不快な感覚を強め、積み重ねてしまう。疼痛が激烈であればある程、それを駆逐したいという欲望は強烈になり、それによって更に重大な感情的な障碍を深めるが、これらの要素はお互いに影響し合い、増大するのである。我々は、己自身の無明によって、己自身に、苦という負担を、自ら背負わせているのである。

我々には、正しい知見が必要であり、そうして初めて、疼痛と身体と心をば、それぞれが、異なる階層の真実であると、見做すことができる。この種の正しい知見は、それらを自由に運用させてるのであって、（+三者を）一体に合成するものではない。それらは一体に合して、己自身の自我の一部となり、その為、我々の立場は、中立的ではなくなり、その結果、それらを有効的に分離することができなくなる。

我々が、自我の角度から疼痛を観察するならば、この困窮を打ち壊すことはできない。五蘊と心が合して一になる時、我々は、策略を運用することができなくなる。しかし、我々が念住と智慧でもって、それらを、行きつ戻りつして観察し、それぞれを分析し、それらの間にある、各々の特徴を比較するならば、それらの間の顕著な違いを発見する事ができるし、また、その事によって、それらの真正なる本性を、明晰に見るに違いない。一つ一つは、独立して存在している。これが普遍的に存在する法則である。

心が、この顕著な特徴に、深々と覚醒した時、疼痛は徐々に消失する。同時に、我々は、疼痛の体験及び、それに執着する所の ”私”、その両者の根本的な関係性に対して、覚醒する事となる。この関係は、心の内部において打ち立てられた後に、外部に向かって展開していき、疼痛と身体に至るものである。疼痛に関する真正なる体験は、心と、心が深く執着する所の自我から来ており、かつ、それによって引き起される生理的疼痛から、情緒的・感情的痛苦が誘発される。

修行する時、我々は全面的な覚知を保ち続け、疼痛感に追従する事によって、その源に至る；專注する時、我々が観察する所の疼痛は、収縮し始め、ゆっくりと心内に回収される。実際には、心が、我々をして執着せしめる事によって、疼痛をば、個人の問題にしてしまっている事を、一たび、明確に覚醒するならば、疼痛は消失する。

それは完全に消失して、心の、知るという特徴だけが、独自に存在する（+事が分かる）。また、疼痛の外部的な現象は、引き続き存在するかも知れないが、しかし情緒的・感情的な執着は、すでに解除されているが故に、それは二度と、疼痛としては経験されない。それと心とは、異なるレベルの真実であり、両者は相互に、影響し合う事はない。

心が、疼痛に対して執着しなくなったその時から、あらゆる関係はすべて切断され、心の根本——知るという特性——のみが残って、不動揺のまま静かに、五蘊の疼痛の中に存在する。その時、疼痛が如何に激烈であろうとも、すでに、全くもって、心に影響

を与えることはできない。ひとたび、智慧が、心と疼痛は真実ではあるものの、それぞれが分離した真実であるという事に、明確に覚醒する事が出来たならば、両者は、二度と再び、お互いに衝突し合うという事が無くなる。身体は、一塊の物質に過ぎない。

疼痛の時に存在した身体は、疼痛が去ったあとも依然として、そこに保持されている。疼痛は、身体の本質を、変えることはできないし、身体もまた、疼痛の本質を、変えることはできない。心は、疼痛が生起する事、非常に短時間留まる事、消失する事の本質を知っている。しかし、心の能知（＝知る者）としての真正なる核心は、身体や感受のように、生起したり滅し去ったりなどしない——心の能知は、安定しており、不変なのである。

この種の状況の下、疼痛は——如何に激烈であろうとも——心に衝撃を与えない。激烈な疼痛が生起しても、あなたは、微笑んでいられる——あなたは、微笑んでいられるのだ！というのも、心とそれは、分離されが故に。それは、覚知し続けるが、しかし、二度と再び、感受に介入する事はなく、故に苦を受けないのである。

これは、念住と智慧を密集させ、応用する事によって証得する事のできたレベル（＋の体験）であり、この段階では、智慧によってサマーディを育成する。また、心が全面的に、一つひとつの側面に関して、徹底的に知り得るまで観察する時、心はサマーディの極致に到達する。それは、言い表す事のできない程の、勇猛さと精緻さでもって集中し、この殊勝な覚知は、物事の徹底的な、余す所のない程の分析を通して、また、そこから退出する事を通して、得るものである。通常、心がサマーディの力に依存して、安寧で静かである所の、定の状態に凝集する時、それは静かに停止する。しかし、あのサマーディの境地は、智慧の力で証得したものほど、微細で高く深くは、ない。

ひとたび念住と智慧が、身体を張って、煩悩に戦闘を挑んで、勝利を得たならば、その一回ごとに証得した所の、安寧と静けさの性質は、特に人を引き付けるものである。これは、禅の修行者が、疼痛感をば、主要な焦点として、五蘊の実相に参じていく道である。この修行は、我々の禅に修行において、無畏なる入門的な基礎を建立する。

私は、心の、知るという根本的特性が、永遠に消滅しない事を、明確に、はっきりと見ることができた。世にある一切のものが、徹底的に壊滅しても、心は依然として、影響を受けないままである。心の能知（＝知る者）としての核心は、独自に存在しており、他のなんらの物事と関連しない事、私はこの一点を、全面的に、明晰明確に、悟ることができた。この時、能知だけが、突出して顕現し、その光り輝く荘厳さは、人をして、尊敬、畏怖させる。

心は、色、受、想、行と識を放棄して、独自に一つの純潔な定の境地に入るが、それは五蘊とは、まったくもって決然として、関係を持たない。その時、五蘊は心に対して、完全になんらの行動も起さない。言い換えれば、心と蘊は、各自それぞれに独立して存在しており、修行者が、持続的に禅の修行をしてきた力によって、それらの間の関係性は、徹底的に切断されるのである。

我々の、以前の体験・経歴と、この証悟によって齎された驚異と神妙は、根本的に、比較して描写する事ができない。心は、この安寧で静かな定の境地の中に、非常に長い時間留まった後、通常の意識に退出し、戻って来る。退出した後、それは以前と同じように、再び五蘊と関連するが、しかし、直前に、徹底的に、五蘊と断絶した所の、特殊な定の境地を証得した事に対して、私は、絶対的な自信を擁しており、それは、己自身が先ほど、ひとつの非常に殊勝な心霊状態の存在を、体験したばかりであることを、知っているのである。この体験によって、決して動揺する事のない信念が、深々と、私の心中に根付いた為に、事実に根拠に基づかない、または不合理なすべての観点に対して、この信念が、疑惑を生じせしめることはない。

私は誠心誠意、直前のサマーディに戻って、禅の修行をした——今回は更に堅固に、また一種の浸透していくような感覚を持って。これは己自身の心中における堅信が、磁鉄の如く凝集したためである。心は、非常に快速に、以前そうであったように、サマーディの安寧、静けさ、定の境地に集中して入って行った。勿論、私はいまだ、心を完全には、五蘊の浸透から解脱させる事はできていないが、しかし、私は巨大な鼓舞を感じ、勇猛に精進して、更に高度なレベルの法を、証得したいと思ったのである。



サマーディが如何に深く、また長時間保てたとしても・・・

それ自体は、最終目的には、なりえない。サマーディは、すべての煩惱を、滅し尽くすことはできないが、しかしそれは、理想的な一つの、プラットフォームを提供することができ、また、その事によって、あらゆる苦痛を齎す煩惱を、全力でもって攻撃する条件を、整えることができる。サマーディによって生じる甚だ深くて、安寧な静けさと定力は、智慧の修行に対して、卓越なる基礎を提供することができる。しかしながら、サマーディ自体の問題は、それがそれほどまでに安寧と静けさを擁するため、人をしてそのことに満足させるが故に、禅修行者は、不注意にも、その中に耽溺してしまう可能性が、あることである。

それは、我が身の上に発生した：私は、サマーディの平静さの中に埋没して五年、この平静こそが涅槃の核心だと信じ続けた。私の指導者であるアチャン・マン (Venerable Ācariya Mun Bhūridatta) が、この間違った知見を直視するよう私に迫って始めて、私はようやく、智慧の修行を実践する事を開始した。すべての痛苦を滅し去るための、智慧の開発に利用する以外、サマーディ (+に耽溺する事) は、禅修行者に間違った道を歩ませる事になる。すべての、全霊でサマーディの修行に取り組む禅者は、みな、この種の陥穽に、注意を払う必要がある。

修行において、サマーディの主要な機能は、智慧の発展を支え・潤わすことであって、それは、この種の任務を遂行する事に、非常に適している。というのも、安寧と静けさと定力のある心は満足して、外部に存在する刺激に対して、追求することをやめるからである。定がサマーディにある時の覚知は、色、声（音）、香、味、触と関連する念頭（=思い）と衝突する事が無い。

安寧と静けさと定は、心が自然に自ずと調和した所の栄養であり、それがひとたび、歓喜の栄養を得たならば、心は満足し、二度とでたらめは動きをしなくなる。それは今、すでに十分に、智慧の修行に勤しむ準備ができた・・・これには目的のある思惟、観察と省察が含まれる。もし、心がいまだ安住できていないのならば——いまだ感官の感受を追いかけて、思想（=思考）と情緒を渴愛しているのであれば、それによる観察は、永遠に真正なる智慧を齎す事はないが故に、その結果、ただ妄想、推測と推測に基づいた断定に至ってしまう外にない——ただ、過去に学習した事柄と記憶に基づいて、実相に対して、根拠のない定義を行うだけである。この種の散漫とした思考は、智慧を齎さないし、苦の滅も齎さない上に、却って、それは集——苦の主要な根源になるのである。

サマーディは先鋭であり、内に向かって專注する為、智慧を支えて観察する事と、思惟する事の補助を、非常に上手くこなす事が出来る。故に、仏世尊は、先にサマーディ

を修するようと、我々に教えたのである。心は、周囲の思想や情緒に干渉されない状態を保持する事が出来れば、全身全霊をかけて、覚知の範囲内で生起する一切に專注することができ、かつ、実際に照らして、これらの現象を観察することができる為に、想像や推測の介入を受けなくて済む——これが一つの重要な原則である。観察が順調な事や、観察に熟練する事、これが真正なる智慧の本性である：観察、思惟と明白な理解は、想像や推測の干渉を受けないか、または誤って導かれること（+から離れることを保証する。）

智慧の修行は、身体から入る——己自身の身分（=身体を部位ごとに分けたもの。以下同様）の最も粗いものと、鮮明なもののグループから、始める。このようにする目的は、実相の真正なる本質を見通すためである。我々の身体は、我々が当然と見做している所の、仮設（=仮説）の通りであるかどうか——それは、一個の完全なる理想の中にある、自我であるのかどうか？この仮設を実験、証悟する為には、我々は全面的に身体を観察しなければならない。心内で、それを分解して、各種のグループに分ける。

一つの部位に続いて、一つの部位、一片から一片へとつないでいく。この、熟知してやまない一副の身体に対して、我々は異なった角度から、その真相を研究しなければならない。初めは頭髪、体毛、爪、歯と皮膚で、その後は肉、血、腱と骨に移行して行く。次には、内部の器官を解剖して、一つまたひとつと、身体全体、頭から足までを分けて、このグループ全体の異なった部位において、その真正なる本質を、はっきりと明白に、見極めるのである。

もし、あなたがこのように、己自身の身体を観察するのに困難を覚えるならば、心内において、他人の身体を解剖しても構わない。一副の他人の身体を選ぶ。たとえば、一人の異性の身体を選んで、出来る限り、その各部分、各器官を観想し、同時に己自身に自問する：どの部分、どの一片が、人を引き付けるのであろうか？どの部分が、真正に、人を魅了するのであろうか？頭髪をまとめて、そこに置いてみる。爪と歯を、別の場所にまとめて、置いてみる。皮膚、肉、腱と骨もまた、一纏めに置いてみる。どの塊が、あなたは好むだろうか？それらの子細に点検して、絶対的に誠実に答える事。皮を剥いで、あなたの前に持ってくる。

この一塊の組織、肉と内臓を包む所の、この薄片の、どこが美しいであろうか？これらの異なった部位を足して行けば、人間になるであろうか？皮膚を取り去ったなら、人類の身体は、愛慕するに値するであろうか？男性と女性——みな同じではないか？人類の身体において、一点の美しさをも、見つける事ができない。それは単なる一包の、全世界のすべての人々を欺瞞して、食欲を生起させることのできる、肉、血と骨に過ぎない。

智慧の任務とは、この欺瞞の局面を公開することである。皮膚を子細に点検すれば、皮膚は大いなる詐欺師である事が分かる。というのもそれは、身体全体を包んでいて、我々が毎日、目にして部分であるために。では、それは何を包んでいるのであろうか？それは、身体の肉、体液と脂肪を包んでいる。それは、筋と腱でもって、骨を包み、それは肝臓、腎臓、胃、腸とすべての内部器官を包んでいる。身体内部にある内臓を、美しいと思ひ、欲望されるべき、貪愛されるべきだと思ふ人は、誰もいない。怖れず、また畏れずに、躊躇もせずに、深々と探索するならば、智慧は、身体の真相を暴露するであろう。一層の組織、乾燥した薄い紗・幕によって愚弄されてはならない。それを剥いて開いて、その下には何があるかを、見てみなさい。これが智慧の修行である。

明晰で明確でなくては、ならない。己自ら、まったくの毛筋一本程の疑惑もなく、これらの事柄の真相を見るためには、あなたには、非常なる恒心と、気力と精進が、必要とされる。禅の修行を一、二度したからと言って、またはたまに何度か修習してみるといふのであれば、決定的な成果は、決して得る事はできない。あなたはこの修行を、一生の仕事としなければならない——あなたが今、正に行っている分析以外、世の中には、それより更に、重要なことなどないかのように。時間は重要ではなく、場所も重要ではない。暇かどうか、快適かどうかも重要ではない。

この仕事が、どれほどの時間がかかるものか、どれほどに困難なものかにかかわらず、あなたは不屈の精神でもって、一切の疑惑と不確実が解消するまで、この観身の法門をしっかりとつかみ、実践しなければならない。身念住の修行は、一つの呼吸毎、一つの念頭（＝考え）毎、一つの動作毎、心が全面的にそれに浸透するまで、常に修行するべきであって、最後までやり遂げる決意に欠けるならば、真相に対する真正な、また直接的な内観を、齎すことはない。身念住が、一心不乱の状態にまで修習された時、身体の連結されている部位のそれぞれは、念住と智慧の火の燃料となる。念住と智慧は、大きな火の集まりとなって、燃焼するが如くに、真相を点検し観察する。一片、一片、一つ毎の部位、一つ毎の部位と言う風に身体を燃やしていくのであるが、これが火法（tapadhamma）の意義、意味である。

全身全霊でもって、真正に、あなたの注意力を引き寄せ、あなたに真実を感じ取らせる所の部位に対して、それらをば、あなたの智慧を磨く砥石とする事。それらの真相を明らかにし、それらにメスを入れて、人をして嫌悪、反感を感じせしめる所の、本質を明確にする事。不浄観は、人身の不浄を洞察するものであるが、これは身体の自然な状態であり、それは元から、穢くて、人に嫌悪されるものなのである。

本質的に、身体全体は、生きていながら、悪臭を発する死体なのである——一つの、呼吸する事のできる、汚水を溜め込んだ、糞尿の池である。ただ、薄い紙のような皮一

枚によって、糞便の全体の外観は、人間らしく見えるようになり、我々全員、外部に見える包装紙によって、騙されてしまっているのである。それは、最も根本的な嫌悪を覆い隠し、人に見られないようにする。ただ、皮を取り除いた時にのみ、身体の、真正なる本性が現れるのである。

皮膚と、筋肉または内臓と比較してみると、それは明らかに人を引き付けるが、しかし、更に詳細に点検するならば、我々は、皮膚には皺や垢がある事に気が付き、汗や油脂を分泌していて、体臭を発散している事にも気が付く。我々は、毎日清潔を保つために、沐浴する必要があるのである。

そのどこが魅力的であるか？皮膚は、また、その下面において、肉と結合しているが、その事によって、皮膚は、内在する不浄と関連せざるを得なくなっている。智慧が、深く探索すればするほど、身体はますます、人をして嫌悪せしめ、皮膚から始まって骨に至るまで、一か所も愛すべき所など、ないのである。

もし、正しく修行するならば・・・

身念住は非常に猛烈で、心のエネルギーは、非常に消耗する。故に、徐々に、心は疲れはじめる。この時は、休憩のときが来たのである。専ら身念住の修行を実践する修行者が休憩する時は、その直前に打ち建てておいた、また苦勞して保持する所の、サマーディの修習に戻って、改めて、サマーディの平静さと定に入り、念頭（＝思い、考え）のない、または観相が生起してあなたに干渉することのない、完全なる安寧と静けの中に、安住すればよい。

智慧の思惟と、智慧の探索による負荷は、しばらくの間、傍らに放り出して、心をして完全にリラックスさせ、しばらくの間、安寧と静けさの中に安らぐ事。ひとたび、心がサマーディの中で、十分に休息して満足したならば、それは自ずと、そこから退出するであろう。

精神は、精力が充満したと感じて、再度、あの厳しい身の観察の修行に戻るであろう。サマーディはこのような方式でもって、智慧を支える仕事を受け持ち、それをして更に熟練、精鋭化させる。サマーディから退出するや否や、身体への観察は、即刻に始まる。毎回、あなたは、念住と智慧を使って、観察するが、その観察は、＜今・ここ＞の状況とマッチしていなければならない。十分に有効的であるならば、毎回の、新しくなされる観察は、斬新なもので、かつ臨場あふれるものでなければならない。それらを、過去のコピー用紙にしてはならない。

どのような場面においても、直接的で、全面的に＜今・ここ＞であり、以前に学んだ事は忘れ、また前回、あなたが身体の領域に潜入する事によって発生した事柄をも、忘れる事——ただ、注意力を、今現在対面している所の＜今・ここ＞に專注させ、有利な形勢を掌握して、観察する事。畢竟、これが念住の意味であり、念住とは、心を＜今・ここ＞に專注させ、智慧をして、鋭く集中させることなのである。

過去の経験は、すでにあなたの記憶の中に貯蔵されており、故に、これをば傍らに放置して、記憶をば、智慧に偽装させないように、するべきである。そのようにする事は、＜今・ここ＞において、過去を模倣しているだけであるが故に。もし、記憶が、＜今・ここ＞における現場において、代替えされるならば、真正なる智慧が、生起することはない。故に、修行する時は、この種の傾向が発生するのを、防がなければならない。

修行する時、一回また一回と、各種の智慧を利用し尽くして、智慧が想定できる所のものを透視し、あなたが全面的に、身念住の法門における、想像出来る限りの、各種の方面を掌握し、身体の本質を不断探索する事。真正に、この修行を、専ら精緻に実践するならば、鋭利で透徹した内観を、生じせしめることができる。

それは、直接、身体の自然な存在の本性にまで浸透し、禅修行者をして、身体への見方を変更させることができる。修行が、このレベルにまで精通したならば、あなたが人間の身体を見るや否や、それはたちまち即刻、あなたの眼前において、分解・崩壊・分離の状態を顕現する。智慧が全面的に、この種の修行の技巧に透徹する時、如何なる人間が出現しても、我々にはただ、肉、腱と骨しか見えない。

身体全体は、一塊のねばねばした、赤い原始的な組織であり、皮膚は瞬時に消滅し、智慧は迅速に身体内部の隠された部分に浸透する。男性であろうと女性であろうと、皮膚——通常は、最も人を誘惑すると思われている部分——は、捨棄されて無視され、智慧は即刻、一塊の、嫌悪され、反感を持たれる所の器官及び各種の、体液が充満する所の体腔の中に浸透する。智慧は、比べるものも無い程に、明晰に、身体の真相を見通す。身体の魅力は、完全に消え失せた。後に残る、何に執着すべきであろうか？
何に貪染すべきであろうか？身体内部の何に、恋々とするべきであろうか？
人は、この一塊の肉団の、どこに存在するであろうか？
煩惱は、身体を用いて、一つの虚妄の網を編み出して、我々を、身体は美しいものだと騙し続け、貪欲的な思想でもって、我々を刺激する。

事実、欲念の対象は偽者である——（+欲望を掻きたてる）全体は、徹頭徹尾の詐欺である。実際、智慧を用いて、しっかりと観察するならば、身体の本質は欲念をして、排斥を生じせしめるものであって、智慧によってこの幻想・幻像を見極めたならば、我々

の目の前に現れる身体というものは、人をして震撼させる所の、血肉に濡れたものでしかない。徹底的にそれを見通せば、心は即刻それから離れるであろう。修行を成功させるキーポイントは、恒を保ち、精進する事である。念住と智慧を応用して、永遠に奮闘し、注意深く目覚めていなければならない。各々のレベルの成就に対して、満足してしまってはならない。毎回、身体を観察する時、ロジックと符合する結論を獲得する必要がある。その後、あなたの心中において、新しい身相を観じて、改めて全体の過程を修習する事を始める。

あなたが身体の内部に関して、浸透する事が深くなればなるほど、異なった部位が、あなたの眼前で分裂し、脱落し、崩壊する。この分解と腐乱の過程に、事細かに付き従い、各々の情景に専注し、また、あなたの智慧をば、この世間において、あれほど恋々とする所の、身相に専注せしめ、その不安定さと無常の本質に、専注せしめる。あなたの直覚的（＝直感的）な智慧をして、腐乱の過程を起動せしめ、かつ、何が生起しているのかを観察する。これが身念住の、もう一つの段階である。

身体が分解されて、本来の元素に戻る時、腐乱する自然な過程を観察する。腐乱と分解は、有機的な一切の生命の、自然な過程であり、あらゆるものは、それらを構成する所の元素に戻るが、最後には、その元素もまた、分離・分解する。智慧をして、壊滅者とならしめ、心眼に替わって、腐乱と分解の過程を想像し、肉とその他の軟体組織の分解に専注し、それらが徐々に分解して、骨以外、何物も残ることのない様を、観察する。その後、再度、身体全体を再生・構築して、再び観察を開始する。毎回、直覚（＝直感）なる智慧をもって、身体を壊滅させ、心内において、再びそれを元の状態に戻して、再び同様の修習を実践する。

この修行は、一種猛烈な心霊的な訓練であり、高度な熟練と気力が要求される。その成就是、修行において使ったエネルギーと密集の程度が反映される。智慧が純粹に熟せば熟すほど、心はますます光明に輝き、清らかで明晰で、力があるものとなる。心の清らかさと明晰さと力の度合いは、どこまで行っても尽きる事がない——その速度と活発さは、人をして驚嘆させるものである。この段階において禅の修行者は、身相に執着する事の弊害に覚醒し始め、潜伏する危険をば、明晰に見て取れるようになるため、強烈な緊迫感を覚える。そしてそれ故に、ますます修行に励むよう、己を追い立てるようになる。

彼らが、直前まで執着していた、比類なき尊さを認めていた所の——人をして愛慕させ崇拝させる所の——身体は、今では、ただ一塊の、深い嫌悪を催す、腐乱した骨にしが見えない。智慧の力を通して、死んだ、腐乱した一つの身体と、生きて、呼吸する所

の身体は、突然、同じ一つの死体となって、双方に何等の違いもない（+のだという事が分かる。）

あなたは、何度も何度も観察し、心を訓練しなければならない。あなたの智慧が、高度に熟して、応用が利くようになるまで。どのような形式の推測も、憶測も、避けなければならない。観察する時、あなたは何をなすべきか、その結果に、どのような意味があるのかという（+先主的な）見方・立場の干渉を、受けないようにすべきである。智慧が見せてくれる所の真相に、專注するだけでよく、己自身の上に、真相が顕現せしめるようにする。智慧は、進むべき正しい道筋を知っているし、それが明らかにする所の真相を、はっきりと明晰に、理解することもできる。

智慧が、身体のある側面に関する真相に対して、堅く信じたことができたならば、その後において、自然にこの側面への執着を、捨棄することができる。心は、それより以前、どれほど專注して観察してきたかにかかわらず、ひとたび、真相が絶対的に明らかになった時、非常なる満足を覚えるものである。身念住の、ある種の方面における真相に覚醒したならば、その方面に対して、これ以上深入りする必要はない。そのため、心は、その他の方面を観察しようとして転移し、その後にもその他の方面においても（+更に修習を続ける事によって）、最後には、すべての疑惑は解消するのである。

この種のモデル、様式の中で奮闘する時、高度な專注力によって、不断に身体内部における、<今・ここ>の本質に、深く分け入って探索するのであるから、必ずや、強大な覚知を維持し続けなければならない。また密集して努力する為に、代価が要求される。

疲労を感じた時、経験を積んだ禅者は、本能的に、心はサマーディに入って、休息しなければならない事を、察知する。彼らは、すべての観察を放棄して、心を一境に置いて、決然と負荷を捨て去り、清涼で、安寧と静けさ、人をして力を回復せしめる所のサマーディに入る。このように、サマーディは（+前述の事柄とは）まったく別の、修行形態なのである。心は、静かな一境性の定の中において安住し、何等の念頭（=考え、発想）も（+生じる事無く、故に）、その能知（=知る者）の根本的特性に、干渉するものは、何もない。心が、全面的な静止の中に浸透する時、身体と外部世界は、暫定的に覚知から消失する。

心が一度満足したならば、それは己自身によって、正常な意識にまで退出してくる。この時、念住と智慧は、飽食して、十分に休息した人のように、精神は煥発として、また再び仕事に戻ることができる。その後、明確な目標をもった決心を伴って、サマーディの修行は傍らにおいて置き、智慧の修行を再開するのである。この種の修行のモデルとしては、サマーディとは、智慧に対して、卓越した支援を与えるという位置づけとなるものである。

身体を思惟することの重要性

我々の主要な欲望は、みな身体と関連・結合している。我々の周辺を、見まわしてみよう。我々は、性欲をしっかりと握み、人体をば、狂ったかのように貪恋する世界を、見ることができる。禅の修行者である我々は、己自身の淫欲からの挑戦に向き合わなければならない。この問題は、性欲に対する愛染が非常に根深く存在する所の、執着から来ているものである。

禅の修行をする時、この雑染は、修行の進歩を妨げる、最大の障碍になる。我々は、身体の観察に深く分け入れれば分け入る程、益々明確に見えてくるものがあるが、どのような形式の煩惱であっても、淫欲ほど強烈に心を障碍するものはないし、心に対して、どれほど強大な力を加えているものか（+ということが分かる）。この執着は肉体から来ているが故に、その本質を明らかにすることは、徐々にではあるが、心の肉体への粘着から来る束縛を、解除することができる。淫欲の対治において、最もよい方法は、身念住である。身念住の修行の成功の可否は、心の淫欲に対する（+反応の）軽減によって、量る事ができる。

一步また一步と、智慧は、身体の真相を明らかにするが、その過程において、根深い執着を切断し、打ち壊すことができ、心境をば、徐々にではあるが、更に自由にせしめ、又、解放・開放せしめる。それらの意義・意味を、真正に、徹底的に明らかにしなければならず、禅修行者は、己自身でもって、これらの成果を、体験しなければならない。もし、私がこれらを描写して見せるならば、副作用を齎すかもしれない——それらはあなた方に、無益な期待を齎すが故に。

これらの成果は、完全に、禅修行者の心中に生じるものであって、かつ（+その内容は）、個人の個性と気質によって、それぞれ異なるものである。ただ、全面的に、注意力を修行の因の上に置けばよく、修行の果は、自ずと熟せしめるべきである。それらが熟する時、あなたは、これは自然の道理である事を、心の底から理解するであろう。

身念住における禅修が、理性と成績（=成果）の二者と智慧とが、完全に結合する段階に入った時、禅者は、実に不思議な事に、昼夜止まる事無く、完全に、身体の観察に浸透する。智慧は、ある種の速度と巧みさをもって、身体の中を移動し、非常に豊かで創造力のある分別、思惟、技巧を展開する。それはまるで、ほぼ休むことなく身体内部の各々の部位ごと、各々の層ごとに転動し、隠れた場所や隙間を発見しては、真相の発掘に余念がない。この段階における修行において、智慧の運用が慣性となり、それは、自動的に顕現するまでになる。それは、それほどまでに迅速で鋭利である為、最も微細

な煩惱までも、追いつき追随する事ができる上、最も大きな煩惱であっても、殲滅させることができる。

この段階における智慧は、極めて大胆で、チャレンジ精神に富み、それはまるで山の鉄砲水が、峡谷に流れ込むようなもので、煩惱が表現する所の執着と貪染を押し流すが、誰もそれを、押しとどめる事はできない。敵手が非常なる曲者であるため、智慧と淫欲の戦いは、全面的な戦闘状態となる。このような局面においては、勇猛であり、かつ妥協のない策略だけが、勝利を得ることができるのであるが、故に、適切な行動とは唯一、一つしか存在しない——全力を尽くして戦う事——禪の修行者は、この事を本能的に、知っているのである。

智慧が身体を掌握した後、それは、煩惱の技量に捕獲されない為に、不断に観察の技巧を、改善し続ける。智慧は、煩惱より先に一步進んでみたり、不断に新しい出口を探し求めたりして、その手段を不断に調整するものである：ある時は、狙う重点を変えて見たり、ある時は、技巧の微細な変更であったりする。修行がますます熟練する時、己自身の、または他人のを含む、すべての身体への執着が、消失する段階に来る。

実際には、いまだ離れがたい執着は残されているのではあるが、それは徹底的に滅し去ったわけではなく、ただ、隠れていて、姿を現さないのである。この点を、しっかりと見極める必要がある。それは、人をして、消滅したと思わせておいて、実際には、不浄観の力によって覆い隠されているために、観察され得ないだけなのである故に、自己満足してはならない——念住、智慧と精進——でもって挑戦を受けようではないか。

心の力でもって、身体の全部をあなた自身の前に並べておいて、それを子細に專注する：これはあなたの身体であるが、一体何が発生するであろうか？智慧は今では、非常に迅速で果敢な状態になっている。それはあなたの面前において、即刻、身体をば分解し、粉碎する。毎回、あなたが身体を己の前に置くとき、それが己自身の身体であっても、他人の身体であっても構わないが——智慧は即刻それを分解し破壊する。このような時、この種の行動は、すでに一つの慣性・習慣となっているのである。

最後に、智慧による、身体の不浄の本質的核心への洞察が、最大限純粹に熟した時、あなたは人をして嫌悪させる所の肉、骨を目の前に並べて、自問しなければならない：この人をして嫌悪せしめる感覚は、一体どこからやって来るのだろうか？この嫌悪の感覚の、真正なる根源とは何か？眼前の、人をして嫌悪せしめる所の情景に專注して、一体何が発生するのかを、見てみよう。

あなたは今、まさに、事柄全体の真相に肉薄しつつある。不浄観というこのキーポイントの段階において、あなたは決して、智慧に身体をば壊滅させてはならず、嫌悪の影像を心中に固定させて、嫌悪感のすべての動静をも、子細に観察しなければならない。あなたはそれに対して、嫌悪の感覚を生起させる：この感覚の根源は、どこにあるのか？それらは、どこからやってくるのか？

誰が、または何が、この肉と血と骨をば、人をして嫌悪せよと仮設するのか？

それらは、ただそれらの様相を、呈しているだけである。それらは、それらの自然な存在の様式で、存在しているだけである。誰が、それらを見た時に、嫌悪感をば、脳に顕現させるのか？

あなたの注意力を、この点に固定させる。この嫌悪感は、どこへ向かっていくのか？それがどこへ移動しようとも、その方向へ追従するよう準備を完了すること。時はいよいよ、身念住のキーポイントに到達したのである。淫欲の根源をば、一攫、永遠に消滅させるチャンスが来たのである。不浄観によって引き起こされる嫌悪感に、全面的に専注する時、あなたの前面に対面する所の、影像に対する嫌悪は、ゆっくりと、徐々に内部に収斂されていき、最後には、完全に心中に滲み入るのである。誰の指導も引導もなく、それは己自らゆっくりと、その原本である所の、根源へと帰って行く。これは、身念住の修行の最も重要な時刻であり、これは、淫欲煩惱とその主要な対象——身体——の間の関係性を、最終的に決裁する時が来た事を、意味する。

心の能知（＝知る者）が、完全に嫌悪に浸透する時、嫌悪感は内在化されるが、その時、一つの深い覚醒が突然に発生する：心は、己自身によって嫌悪を生産し、心は己自身によって喜びを生産し、心は勝手に醜さを作り出し、また、心は勝手に美しさも作り出す。これらの性質は、真正に、外在する物質世界にあるのではなくて、心は、ただ、これらの属性を、それが知る所の対象に投影し、その後において、己自身が、己自身を欺瞞して、それらは美しい、醜い、好ましい、または好ましくないと、信じ始めるのである。実際は、心は、時々刻々、絵柄・イメージを描写し続けている——己自身と外部に存在する世界のイメージ——そしてその後、己自身が己自身の幻惑の中に落ち込んで、それらは真実だと信じてしまうのである。

この点において、禅者は、徹底的にこの真相をはっきりと理解している——心自身が、嫌悪や喜びを製造する事を。直前に観察された焦点——あれらの肉、血と骨——その内部には嫌悪や、または他の何かが、ある訳ではない。本質的に、人の身体は、人をして嫌悪させたり、喜ばしく感じさせたりする事はない。それは、心が、これらの感覚を造りだして、その後、これらの感覚を、我々の面前にある映像の上に、投影するのである。

ひとたび、智慧が、絶対的明晰さをもって、これらの欺瞞の遊戯に気が付いた時、心は即刻、すべての美しさ及び醜さの外部的存在への認識を放棄して、内部に向かって転回して、この観念の根源に向かって專注を始める。心自身は、この欺瞞における犯罪者でもあり、被害者でもある。心は、詐欺師でもあり、騙されし者でもあるのである。

心以外に、その他の何者かが、美しさとか、醜さとかの絵柄・イメージを、描写できるものはいない。故に、禅の修行者によって、分離され、また外在する所の專注の対象とされた不浄の影像是、心中に浸透し、心によって製造された嫌悪と融合する。実際は、この両者は、同一の、ひとつのものごとなのである。覚醒が発生すると、心は外在する映像、外在する相を放棄するが、こうする事によって、それは淫欲をも放棄する事になるのである。淫欲は、人体への見方に依存しているが、これらの見方における、真正なる根本が暴露されたならば、それへの同意は、完全に破壊される。

我々の知っている外部が崩壊したならば、我々のそれへの執着もまた、自ずと消失するのと同様の事が起こる。淫欲の雑染による影響——無始以来、粗暴に心に対応し、多くの劫において、心を誘惑して生に執着せしめ、その事が原因で、心は死を体験し続けた——この潜伏する所の執着は、今、すでに力を失った。心は、それから受ける影響を超越した。心は今、自由になったのである。



この説明を導きとして

私のこれらの説明は、前方にある道筋を指し示しているのもであって、一言一句聞き漏らさずに暗記する為の、授業をしている訳ではない。私はこれまで、私の体験を具体的に説明するのを好まなかった。というのも、私の弟子が、私の文章から勝手に定義を定めて、彼らの、真理の本質を追究する所の（+修行に）憶測を付け加えるのを、恐れるからである。

私の開示は、一種の文字にしかすぎず、それ自体が、人を目覚めさせるわけではない。唯一、念住の覚知、安定して＜今・ここ＞に安住する事だけが、あなたをば、直接、真理の前に連れて行ってくれる。永遠に、真理に対して先入主を持つことなく、禅の修行に対して、憶測や推測を持つことなく、また、この解説を読むことによって得た知識に対して、このようにすれば、あなたの身・心の真正なる本質を理解できるなどという、誤解を招かないようにして頂きたい。

念住を導きとして、しっかりと直接的に内観する事、また、智慧で以て観察し、修行に精進する事。こうして初めて真相に浸透することができる。この段階の修行においては、身体はすでに完全に内在化されており、淫欲の力もまた、切断されている。更に一步、前へ進むために、あなたはあなたをこの段階まで連れてきた禅の修行の技巧を利用して、鍛錬の手段としなければならない。

この時の目的は、念住と智慧を訓練するためであり、それは、非常に把握しがたい、微細な心理現象に対応する時、それを更に加速し、精鋭化し、確実にするためである。身体の不浄のイメージを、平常の如くにあなたの面前に置いて、それを心内に撒収する時、それを観察する。その後、再び、イメージをあなたの面前に戻して、改めて修習を開始する。イメージがどのようにして、心に溶け入るのかを気を付けて観察し、不断にこのように観察することによって、心がこのことに非常に熟練するまで続ける事。ひとたび熟練したならば、心は、イメージに專注するやいなや、後ずさりして戻り、内側にある能知と融合する。

淫欲の根本的道理が、明白に明晰に理解することができたならば、次には、この純粋な心の鍛錬でもって、心を訓練する。淫欲はもはや問題にならない——それは永遠に切断されて、二度と以前のように重要視されることはない。しかし、それはすでに大部分において消滅させられているものの、しかし、いまだ不徹底であるが故に、少々の部分は残されているが、それはちょうど残された残渣とか、または錆が心内に残っているようなものである。

この段階において、外部にある全面的認識と、心自身の内部にある映像・イメージは融合する。我々は以下のように言うことができる:少なくともすでに、欲望への観察は、50パーセントは完成していて、修行は、すでに最後の段階、最高の段階に来ている、と。上に述べた修行方法を用いて、淫欲が残した微細な部分については、必ず、徐々に滅し去らなければならない。不断に観想を精錬する事と、不浄の相への浸透は、智慧の純度を高めることができ、智慧の純度が強化されれば、淫欲が消滅するパーセントは、益々上がって行って、淫欲は、やがて消滅する。

智慧の掌握を加速すれば、イメージが心に戻って来る速度も速くなる。最後には、ひとたび專注しさえすれば、一つの影像・イメージは、即、心の中に飛び込んできて、それ(=能知)と融合して、その後には消失する。不断の練習は、この過程における速度を、益々加速させる。最も熟練する時、映像は、それが心に浸透するやいなや、即刻、消失するようになる。

この観察の技巧は、修行における最高の段階の基礎にまで進展するが、この段階での、残ってある欲貪は、全面的に撤退し、非常に速くに、残された部分が、消滅させられることになる。ひとたび、禅の修行者が、この最後の段階にまで到達したならば、醜さと美しさの、真正な根源は、明晰に見通されて、欲貪は、二度と台頭することはない。その、心へのコントロールは、すでに断ち切られたのである——そして、この状況は、決して、逆転することはない。

そうではあっても、淫欲のすべての痕跡を消滅させる為に、ある種の仕事は、いまだなされなければならない。この作業には、時間がかかる。この部分の観察は、非常に複雑で煩雑である：身体の影像・イメージを狂ったような速さでもって生起させ、また滅し去らせるのであるが、これは最も大きな努力を払って欲貪の残りを、根ごと引き抜く(＋修行な)のである。この段階における禅の修行者は、本能的にどのように実践すればよいのかを知っており、故に、誰かに催促される必要もなく、己自身を観察して、自然な衝撃の力を、打ち建てる事が出来るのである。

念住と智慧は、慣性(=習慣)となる——それらは、非凡な速度と巧みな協調性をもって、運用される。この観察が頂点に達した時、身体の影像・イメージは、出現するや否や、消失するようになる。これらの影像・イメージが、心に溶融したのかどうかとは関係なく、それらの出現と消失は知られるが、生起と滅し去るイメージの、その生じる速度が余りに速いので、外部と内部における認識は、すでに意味を持たなくなり、最後には、映像・イメージは、覚知の内において、瞬くように閃動しながら生・滅するものの、その速さは、余りに速すぎて、それらの相を、維持できない程になる。

一回滅し去るごとに、心は、一つの深刻な空を体験する——映像・イメージにおいて空であり、相において、空である。一つの極端に微細な覚知が、心の中において突出し、一つ毎の影像・イメージは一瞬煌めいて後、滅し去ると、心は更に深くに、それが齎す所の空を感受する。最後に、心の中において製造された映像は、同時に生起して、同時に滅し去り——ただ空だけが残される。

この空の内において、心の能知（＝知る者）の根本的特性は、全面的であり、比べる事の出来ない程の主導（+的役割）を果たす。心が造作する所の、すべての身体の影像・イメージが滅し去る時、欲貪は、徹底的に消えてしまい、身念住の修行は、ここにおいて、最終章となる。最後には、一切の相は、本質において、皆空である事が覚醒される——自我において空であり、美しいとか醜いとかの、異なった特徴において、空である——ここにおいて、禅の修行者は、欲貪の巨大な弊害を、見ることになる。

この、人をして墮落せしめる雑染は、至る処において毒害を流し続け、それは人類の関係性を腐蝕させ、世界全体を騒乱させ、人々の思想、情緒・感情を歪曲し、人々をして、憂慮、不安と永遠の不足・不満足に至らしめる。これ以上の何ものか、人類の生活を混乱させる様なものはない。それは、世間における、最も壊滅的なエネルギーである。

欲貪が徹底的に滅し去った後、世界全体は空になってしまい、点火されて、人の心を燃焼し、炎を扇動して、人類社会を蹂躪する、あのエネルギーは、今、消滅されて、埋葬された。淫欲の火は、永遠に滅し去られた——もはや何者かが遺留されて、心を苛む事はない。欲貪は、滅し去った。涅槃は、手の届く範囲に入った。欲貪は、一切を覆い隠し、真相の一切を覆い隠す。故に、ひとたび、欲貪が最終的に滅し去った時、我々の、道、果と涅槃への視線に、障碍はなくなった——それらは、もはや、手を伸ばせば、届く事が出来るのである。

総括してみるに・・・

欲貪の心に対する束縛が切断されたならば、すなわち、阿那含を証した事になる。引き続き、阿那含は継続して、この成果を齎した所の観察の技巧を練習して、更に深く分け入り、これを拡大し、円満して、身体の相が、二度と心中に出現しないように、しなければならない。心は、映像・イメージを造りだした後、己自身が己自身の創造物に囚われて、（+その罫に）落ち込んでしまう。

一人の円満なる阿那含は、まったくの疑いの余地なく、この事を知っている。人の身体及び、人々が信じている所の、それが代表する所のものは、すべて心が、己自身を欺瞞しているものなのである。身体は、ただの一塊の物質に過ぎないし、また一塊の、自然なる元素に過ぎない。それは人ではなく、また人をして、喜ばしく感じさせるか、嫌悪させるか、という事とも関係がない。それはただその様であり、己自身の自然なありようでもって、あるがままに存在しているだけである。

心は、騙しの場面を作りだして、我々に認知させ、その後にはそれは、己自身の間違った知見によって、騙しの場面を、受け入れるのである。人類のすべての器官は、ただ、心の、知るという特性が、己自身に奉仕させようとする、道具に過ぎない。心の知る（+という特性）は、全身に遍布しており、覚知・意識が全身に遍布・浸透するのは、心の本質の体現に過ぎない。身体を構成する物質の元素には、意識というものは無く、それらの内部には、知覚という特質はなく、そこに意識の存在は、ない。

身体と関連する所の、知覚と意識感は、純粹に心であり、また心による顕示でもある。目、耳と鼻は、心の覚知を通して初めて、認識する能力を得ることができる。これらの器官は、ただ意識を発生せしめる所の道具に過ぎず、それら自体には、意識・覚知は存在しない。通常、我々は目によって、物が見えると思っている。

しかし、真正に、身体の真実の本質を理解したならば、我々は、眼球とは、一塊の組織に過ぎず、目に流れる意識こそが、真正に視覚の対象を見、また知っているのものであって、意識が目をば、視覚の境界に接触する媒体としているのである（+ことが分かる）。我々の視覚器官と、道端にある一匹の死んだ動物の眼球とは、同じものである。肉眼それ自身に、内在する価値はない：目そのものは、基本的に自主性など持たない。この道理に、人々は納得できるはずである。そうであるならば、身体は自我（=己自身）であり得るであろうか？それは自我（=己自身）によって、保有されるものであろうか？そのような（+考え）は、自然法則に合致しない。

全身に遍布・浸透する意識流は、それ自身の所へ退くようにして戻って行き、かつ、聚集して、高く深いサマーディに入る。この道理は明晰・明確に、見て取ることができる。その時、躯体全体は、ただ一塊の物体と化す——それは、一つの樹木の切株のようなものである。心が、サマーディから退出してくると、意識・覚知は、身体に戻って行って、四肢・百骸の一つひとつの部位に、拡散し、遍布する。覚知と知る能力は、心——身体ではない——の基本的な機能である。

この段階における禅身体者が、正常で、明晰な、目覚めた意識状態にある時、能知（=知る者）は全面的に、己自身を覚知していて、心と知覚が、時間性を超越する事、永遠の同一的核心であるを覚知するが、物質の元素は、それを覚知することはできない。サマーディの内において、身体は覚知から消失してしまうが、しかし、覚知自体は永遠に消失することはない。実際、これは自然の不変の道理である。そうではあるものの、煩悩が心に浸透する時、それらはすべてを自我——私、または私のもの——として、きつく握りしめるが故に、個人における真正なる本性と、それが賦与した所の生命の六根とを混同してしまう。

これが煩惱の本質である。智慧は、まさに正反対である：それははっきりと、身体とは何であるかを知っており、かつ、この誤った知見を、修正する。煩惱は永遠に、身体を強く握りしめて、人をして身体は、個人における、非常に特殊な部分であると、信じせしめる。智慧は、身体をば、一つの普遍的な物質の合成体であると見做し、かつ、それゆえに、それによる一切の自我への執着を捨棄する。

脳の説明をしよう。それは一塊の物質であり、脳は、ただ、人類の意識の道具に過ぎない。心が安寧と静けさと、定の深い境地に進入した時、通常は、全身に遍布している覚知・意識は、同時に全身の各部位から集中的に、胸の中間部分に聚集する。能知の特質は、この一点において、顕著に顕現するが、それはしかし、脳から流露したものではない。

記憶と学習の機能は、脳と関係があるものの、しかし、真相に対する直接的な知見は、却って、脳とは関係がない。一步一步、初歩的なサマーディから修行して、経験と理解の段階まで来ると、もともとすべての事柄は心の中で発生している（＋という事が分かる。）。これが真相のありどころであり、正しく修行している禅修行者は、修道における歩みを、一步また一步と、了解することができる。

一切の法の真相を理解するという事について、脳は必要とされない——それは根本的に役に立たない。心の安寧と静けさ、光を放つ特質は、心の内において体験されるが、それらは明らかに、この位置（＝胸）から流露するのである。心のあらゆる方面において、最も粗いものから、最も微細なものまで、みな明確に、この位置から流露している。また、すべての雑染の影響が、最後に心から滅し去られる時、それらもまた、ここにおいて消失するのである。

心の中において、想（saññā）と行（sankhāra）は、無明の主要な媒体である。阿那含（＋を証得した後）において、身念住を修行する後続の段階から、この自我の心理的構成は、中心的な位置を占めるようになる。自我の物質的な構成——身体——はもはや大事な要素ではなくなり、阿那含における、すべての焦点は、自然に、心理的構成に向かつて転移する：受、想、行と識である。その内、想と行の作用は、非常に重要である。それらは不断に生起して、またお互いに影響を与えながら、それらが賦与する所の、心において何らかの意義を持つ心理的映像・イメージを形成する。

それらを点検する時、依然として、同様の観察の原則を用いるが、しかし、この時は身体の影像ではなくて、思考の過程が、監視の主題となるのである。智慧は、念頭（＝考え、発想）と記憶が、如何にして生起し、また消滅するのか、それが如何にして、無尽に循環する心理的活動の中で、生・滅するのかを、密集した（＝絶え間ない）反省と

観察の修習の実践をする。念頭は、覚知の内において、生じるや否や滅し去ってしまう。その本質が何であろうとも、結果に変わりはない。

一つの念頭は、一瞬の短い時間存在した後、滅し去る。この思考全体の過程に、直接標準を合わせて、調査するならば、それは、意識の能知の根本的な特性の核心を通り抜ける（+事が分かる）。それは、一つひとつの念頭、一つひとつの考え方の生起と消滅に付き従って、その後、別途浮き上がってくるものに專注する。

これは、時間を消耗し、エネルギーを消耗する巨大な任務であり、昼夜分けずに、毎時間、毎分、毎秒、分心（=心の分散）しない事が要求される。しかし、この段階においては、時間と空間はあまり関係がなくなる。この内在における点検は、数週間か数か月の間、コツコツと実践する必要がある、念住と智慧は、不断に波動を起す所の、揺らぎ続ける心理的現象と、四つに組まなければならないのである。

この種の作業は、心のエネルギーを非常に消耗する。智慧は、休息もないままに、心理的活動の各方面に追隨して、日夜、絶え間なく作業をする。それは、思惟の過程を観察すると同時に、それはまた、思想と意見でもって、心の運用について疑問を發し、探索して、その真実なる本性を洞察する。これは、道——修道——の為に思想する（=思考する）のであり、それは智慧が真相を發見するための、道具であるが、己自身が思想の中に耽溺するのではない——それは集——苦の原因である。

観察における密集性（=途切れない事）から、心は脆弱になり、多くの時間、緊張する仕事を続けていたために、それは、遲鈍になり、緩慢にならざるを得ない。この種の状況が発生する時、休息が必要だ。この段階においては、心は、どの時よりも増して、定において休息し、サマーディに安住しなければならない。ただ、智慧の修行の効果が、それほど殊勝である為に、サマーディの平静さと定の相形の下では、それが蒼白にみえて（=劣ってみえて）、故に、禪の修行者は通常、サマーディを選ばない。

心は、高揚しており、高度に覚知する状況にあつて、この観点から言えば、サマーディは時間を浪費しているようであり、停滞している心理状態であるように、感じられる。実際、サマーディは智慧を支援する、重要で不可分の部分ではある。故に、もし、必要であるならば、心がサマーディに入ることを強要して、今現在、手の内にある調査を手放し、安寧と平和、完全な集中を証得することの出来る心理状態に、專注せしめなければならない。

そこにおいては、それは休息して、精神の完全な回復を得られるし、その後、改めて、心の解脱に関する仕事を、開始すればよい。心がひとたび、サマーディの静止状態から退出すると、それは即刻飛び上がって活動を開始して、これ以上待てないかのよう

に、その主要な仕事に戻る——心内における、一切の煩悩を滅し去り、壊滅させる仕事である。

注意しなければならないのは、心をば、智慧の修行の道の上で、狂ったように走らせて、休ませないなどという事がないようにするべきである。過度の観察は、一種の集（samudaya）であって、心の中に浸透し、それが、行（sankhāra）に落ち込むことによって、一種の呪詛になる事がある。智慧は、思想（＝思考）と分析の機能を利用して、心を観察するが、これらの機能自体は、ただ只管前進するのみで、調節する事を知らない。故に、常に、コントロール（制御）を忘れずに、内在に関する仕事と休息の間において、適切なバランスを保つ必要がある。

この段階の修行においては、智慧は全力で赴く為、休息するべき時には、同様のエネルギーの度合いでもって、サマーディに専注しなければならない。これが、道、果と涅槃における中道である。このレベルの修行では、心及びそれと名蘊（nāma khandha）との関係が、観察の焦点となる。心は、我々の存在の核心であり、知る、という根本的特性であり、それは純粹で、浄化された簡単な覚知によって構成されている——心はただ、知る、のである。善悪の覚知、及びそれに伴う判断は、すべて心の活動に当たる。ある時においては、それらの活動は、念住の様を顕現し、ある時には、智慧であったりする。

しかし、真正なる心は、完全にいかなる活動も顕現する事はないし、いかなる状態も顕現しない。それはただひとつ、知る、という境地に過ぎないのである。心中に生起する活動、たとえば、良し悪しの覚知、または楽しさと苦痛、または称賛と誹謗は、すべて心中から流出した、意識の状態である。それらは、心の活動と状態を代表しているが、それらの本質は、不断に生・滅しており、この種の意識・覚知は、結局は不安定であり、頼ることのできないものである。

この観点から言えば、想、行と識は、すべて心の状態であると言える。これらの状態は、我々が、名蘊——心理現象——と呼ぶような、波動を齎す。受、想、行と識は、お互いに影響し合いながら、相と影像・イメージをば、心の中から生起せしめるのだが、心は、それらを知る所の、覚知なのである。

雑染の影響、たとえば、欲貪は、この覚知が知っている所の内容を操縦し、汚染する。心が欲貪の統治の下にある時、この内在における影像・イメージは、真であり、かつ実質的に存在しているのだと信じてしまうが故に、その時には、貪と瞋が、生じてしまう。この内在化された相は、それらに認知された所の本質——好いまたは悪い、喜ばしいまたは嫌悪——に従って、受け入れられたり、追い払われたりする。

心の観点は、結果的に、この二つの極に分裂させられ、それは、世界の二元性と不確定性を認める（+畏に）はめ込まれてしまうのである。心の能知は、生起したり滅したりはしない。しかし、それはあれら生起と滅し去る現象——例えば煩惱と蘊——の特徴を模倣する。智慧が最終的に、騙しの局面を見透かしたならば、心は、これらの現象に絡むのをやめる・・・それらがいまだ、蘊の範囲内で、生起と消滅を継続していたとしても。

心はこのようにして、これらの現象において空（クウ）となる。我々が出生してからこの方、その一瞬一瞬において、五蘊は不断に生起し、また滅しているが、それらは、本質的になんらの実質もなく、その中から何らかの、本質を見つけ出すこともできない。心は、これらの現象に対して、それらにおいて、自我という一つの外観を定義して、心はそれらに自我的な実質があるとか、己によって所有されているとかと思いついで、それらに執着してしまう。この誤った知見は、一つの自我（=エゴ）を作りだし、それ故、泰山より重い深重な負担・負荷を齎す事になる。

自我の幻覚が造り出した邪見による、唯一の報酬は、苦である。心はすでに、これらのものごと（+の真相）を観察することに、完成をみた。精鋭な直接的な智慧でもって、それらを明晰に見通し、身体は、ただの自然現象である事が、すでに、明確に、理解された。身体に関する真実は、身体内部に存在する物質的特性の内に限られる。（+身体の）内部には自我はなく、故に（+身体は）二度と再び、喜ばしい対象とはならない。

身体的感受——身体内部に発生する所の疼痛、快適さと中性的な感受——は明確であり、真実であるが、しかし、それらは、特定の範囲内における真実であるにすぎない為、同じく捨棄される。しかし、智慧はいまだ、純粹に、心の中から生起する所の、微細な感受を見通す能力を持っていないが故に、心理的な感受と感情的な感受——心内部にのみ発生する苦、楽と捨受——は、不断に心の因と縁を吸収し続ける。目前において、いまだそれらの真相を理解する事はできていないが、これらの微細な感受は、不断に覚醒の作用を生起させており、心をして、更に一步進んで、それらを観察させんとするものである。



総体的に、念頭（＝考え、発想）と想像の源泉は、行蘊と呼ばれる

一つひとつの念頭、一つひとつの考えは、心の中において、非常に短い時間、波動して（＝揺らいで）、その後、消失する。これらの心理的な波動は、本質的には、何か特別の意味を持たない。というのも、それらは、ただ覚知の中において、一瞬閃めいて後、痕跡を残さずに、消失するのである。唯一、想蘊がそれらを手に取る時、それらはようやくにして、特定の意味と内容を持った思想と意見に変化する。

想蘊は記憶であり、認知と定義の（＋働きをする）名蘊である。想（saññā）は、念頭の断片を手にとって、その後、それを定義して、それらを拡充し、それらの意味を仮設し、それらを議題に変えてしまう。次に、行（sankhāra）は、この議題をば、連綿として絶えることのない、妄想に仕立て上げる。

どのようであれ、想が主要な扇動者であり、行がひとたび、非常に短い時間、閃動したならば、想は即刻それを取り上げて、それを〈あれ〉とか〈これ〉とか定義する——あらゆる騒動を引き起すのである。この二者は、あらゆる面倒を製造する心理的な作用であり、二者は一緒になって、物語を語る——幸福な話、悲惨な話——その後、それらをば、自我（＝己自身）にとっての真実であると定義する。

想は、記憶を頼りに、覚知から生起する所のものを分別・認定し、それらを定義し、それらに意義を付加しようとする。行の生起と消滅には、明確な始まりと終焉があるが、それはちょうど雷の放電または蛍のように、チカチカとしている。仔細に観察すると、想蘊は行蘊よりも、更に微細である。

行が覚知に闖入する事が、念頭（＝考え、思いつき）の基本的枠組みとなる。想は、念頭が閃動するが故に体験されるようには、体験されない。心が完全に停止した時、諸蘊もまた非常に静かである時、我々は一つひとつ毎の、蘊が生起する方式を、明確に感知することができる。

想はゆっくりと拡散されて、心に浸透し、それは墨水が画仙紙の上で拡散するが如くに、心理的な絵柄を描くまで、ゆっくりと展開しつづける。想の導きによって、不断に生起する行は、図像を作りはじめ、またそれに見合った物語を編纂し始める。そしてその後、彼らは、彼ら自身に生命を吹き込むのである。先に想が、行の波動を分別し、定義して、それらをば、認識できる所の影像・イメージに仕立て上げる。行は、それに引き続いて、詳細な描写を行い、こうして、各種各様の思想（＝考え）が形成される。このふたつの心理的機能は、すべて自然現象であり、それらは同時に生起するが、それは、それらを知っている所の覚知とは、まったくもって異なるものである。

今、心は、繰り返し、かつ不断に、休むことなく諸蘊を観察する時、それは純粹に、成熟してくる。智慧によって、思惟を分別する事を通して、我々はまず、色蘊を捨棄することができる。初期段階での観察において、智慧がその他の蘊を——見透かして——かつ手放す前に、色身を見透かすのである。その後において、心は同様の方式で以て、徐々に受、想、行と識への執着を捨棄する。簡潔に言えば、智慧が、自我（＝エゴ）の心理的構成を見透かす時、心はそれを手放すことができる；それ以前では、それは執着して、手放すことができない。ひとたび、智慧が、それらを徹底的に穿り、見通したならば、心は、それらのすべてを、手放すことができる。心は、それらに関して、心理的な波動に過ぎない事、実質的な存在などない事を知り、認める。

好いものであろうとも、悪いものであろうとも、念頭（＝考え、発想）は、これまでと同じ様に、生起して、また滅し去る。それらが、どのように心の中に、顕現しようとも、一瞬間を超えて存在する念頭など、一つもない。念頭は、真正なる実質と意義に欠けており、継続して存在する事はできず、故に、それらは頼りにならないものなのである。それなのに、何が、我々をして、不断に思考させるのか？何が、それらを製造しているのか？

暫くすると、それは一つの念頭（＝思いつき）を捨り出し、もう暫くすると、もう一つ別のものを捨り出して、永遠に己自身を騙し続ける。それらは、色、声（音）、香、味と触から来ており、また、それらは受、想、行と識から来ている。我々は、認知の段階から、当然の如くにそれらに同意するが、この騙しの局面が、大きな炎となって、我々の心を焼くまで、それを続ける。心はまさに、これらの要素、これらの習気によって汚染される。

観察の目的は、これらの要素を取り除く事であるが、（＋今）それらは取り除かれた。心の、真正なる本性は、顕現した。我々は見ることができ・・・心が出かけて行って、対象に介入しさえしなければ、それは自然な安寧と静けさを保持して、発光する事を。まさに以下のように言われるが如く：”比丘たちよ！本来の心の内在は、光明で徹底的に清らかである。しかし、それが通って来た煩惱と混合されて一つになる時、汚染を受けるのである。” 本来の心は光明なる心である。

この文言が指すのは、生死輪廻の内において、一生また一生と流転する心の、その元来の性質を言うのである。それは、生まれたばかりの赤子に例えられるが、（＋赤子の）心は、その官能がいまだ健全に発達していないため、感官の対象を、十分に掌握することができない。それは、すでに生死輪廻を超越した所の、絶対的清浄なる心の本質を、指すものではない。我々が一つの段階、また次の段階へと、全面的に心を観察する時、

それ以前において、四方に漫遊していた各種の汚染元素は、聚集して一つの光明点を形成し、心内の自然な光明と融合する。

この光明は、それほどまでに広く偉大であり、たとえ大念住(supreme-mindfulness)と大智慧(supreme-wisdom)のような、卓越した心理的功能であってさえも、その始めにおいては、その魅力に傾倒してしまう。これは完全に新奇な体験であり、これまで経験したことのないものである。それは驚異と殊勝を展開し、それ程広く偉大であり、人をして敬慕・畏怖させるが、その時点では、それを比類なきものだと、思ってしまう。なぜであるか？

それは絶対的な統治者であり、無量の劫において、三界を統治してきた存在であるが故に。心が卓越した念住と智慧でもって、それから抜け出す力に欠けていれば、この光明点は、引き続き心を惑わし続ける。

無始以来、それは心を掌握し、支配して来たが、この微細な煩惱は、心に圧力を加え、それが業を造(+)すように迫り、心を圧迫して、不断に生まれ変わるよう強要し、無数のレベルの生命を、体験させるようにする。最終的に、この繊細な、自然に放光する所の心は、生命の絶え間ない輪廻を引き起し、生死を遍歴し、経験する。

ひとたび、心が、徹底的に、もはや明確、明瞭に、受、想、行と識を知り尽くしたならば、残されたものは、唯一、心の内部における微弱な変化の揺らぎである事が知れるが、これは微細な行(sankhāra)が心内部において形成される(+ことのよって生じる)波動である:一つの微細な形態の楽、一つの微細な形態の苦、一つの微細な光明が、心の内部において発光している・・・これがすべてである。大念住と大智慧は、これら内在する所の攪乱に焦点を当てて観察して、不断にそれらを研究し、分析するのである。

この光明は、各種の煩惱が聚集して形成されたものであり、明晰・明確に認知される光明点である。それはひとつの、非常に精緻・繊細な光明であって、心の内の特定の一点に集合する。ひとつの、相応する所の、精緻で繊細な暗淡(=薄暗がり)が時ならず生起して、この光明の中心を暗くさせるが、同じような形式で、微細な苦を浮き上がらせる。実際は、光明と暗淡は、同じ硬貨の両面であり、両者は共に世間的事実である。このレベルにおいては、光明、暗淡と苦は、全員同じ輩であって、同時に浮上し、顕現する。こういうことが原因で、心が、この奇妙な光明を体験している時、この体験がいつ何時変化して破壊されるのかと恐れて、それは常に、小心翼翼としている。

念住と智慧は、暗淡に打ち消されないように、この光明を保護し、かつ維持する。いかに微細であろうとも、この汚点は、なおも煩惱の兆しなのである。故に、禅修行者は、ここにおいて自己満足に陥る事無く、最大の恒心でもって、智慧を用いて、心中の光明におけるこれらの微細な変化を観察しなければならない。

この種の憂慮が齎す負担を解除するため、また、この問題に関する円満な回答を得るために、あなたは、己自身に問うべきだ：この光明は一体何なのか？あなたの注意力を、あなたがよく理解できるまで、この上に専注させる。

それはなぜこれ程までに、色々に変化するのか？

一瞬、それは発光し、次の一瞬には少しばかり暗淡になる；

一瞬、それは楽になり、次の一瞬には苦になる；

一瞬、それは徹底的に満足し、次の一瞬には不満が潜入する。

この微細な楽が、最も微細な不規則性を醸している事に気をつける事。

その後、（+それは）心と同じレベルにおける微細の程度が一致して、最も微細な苦を顕現する。

これらは、我々に、懷疑を齎すに充分である。なぜ、これほどまでに、微細で精緻なレベルに到達した心が、この種の異なった状態を顕現するのか？

それは、徹頭徹尾安定しておらず、真実でもないのであるか？

不屈の精神で以て、不断に連続して疑問を發する事。恐れてはならない。あの光明の壊滅が、あなた、己自身の真正なる本質の壊滅であるといって、恐れてはならない。

その中心点に専注しさえすれば、その光明を明晰に観察するならば、あなたがこれまで観察した事のある現象と同じように、同様の相——無常・苦・無我である事（+に気が付くであろう）。唯一の違いは、その光明は、更に微細で精緻である事である。

この段階における観察は、どのようなものごとであっても、あつて当然とは思えず、世間的な実相の領域の中においては、信頼できるものは何もない。あなたの専注を、深々と心内に持ち込んで、智慧でもって挑戦を受ける事。すべての贗物の、その源は、心より出発しているのであり、その中で最も顕著なものは、あの光明である。それは最高級の、最終的な贗物なのである。それが、その他の一切のものより、愛惜され、保護されるに値するため、あなたはそれに干渉したいと思わない。

物質的身体全体において、この光明ほどに、それほど突出して、顕現するものはない。

それは、このような一種の、催眠作用を齎す内在における驚嘆を惹起する——また、次には、それを保護したいという、欲への執着も齎す——あなたは何をもってしても、それに干渉したり、それを混乱させたりは、したくないと思う。これがそうなのだ、見てご覧なさい：これが、あの宇宙の最終的な統治者——無明なのである。

しかし、あなたは、それを確認し、認めることができない。というのも、今までそれに、出会った事が無いが故に。この段階においては、あなたは自ずと、出会った所の光明に、欺瞞される。その後、念住と智慧に充分の準備が整った時、あなたは誰かに教えられなくとも、真相を知ることになる。

これこそが無明であり、真正なる無明は、ここにおいて存在している。それは、人を迷わす光明なのである。無明をば、魔とか鬼とかまたは、一頭の猛獣であるなどと、想像してはならない。実際は、それは全世界の内において、最も人を引き付け、最も美しく、人を喜ばせる完璧な模範なのである。

真正なる無明は、我々の想像しているものと、非常に異なる。故に、あなたが無明に遭遇する時、それが無明である事が分からない。そして、あなたの修行は、そこで行き詰まってしまう。もし、指導者がいて、あなたを指導して、あなたに、観察の方向を、指し示してくれないのであれば、その真正なる本質に覚醒して、かつそれを超越する以前、あなたは非常に長い時間、この袋小路に、嵌り続ける事になる。指導者がいて、あなたに次はどのように進むべきかを指導するならば、あなたは、根本的な道理を瞬間に理解して、光明の中心に信頼を寄せる事もなくなり、それに対して、致命的な打撃を与える事もできる。

あなたは他の自然現象を観察するのと同じ態度で、この部分を観察しなければならない。心が、五蘊に対する執着を放棄した後、この段階は非常に精妙になる。その他の一切を放棄してはいるものの、いまだ己自身を放棄してはいない。それに内在する所の、知るという特性は、依然として無明の根本に浸透しており、己自身の真正なる本性に対しては無知である。故に、依然として己自身に執着し続ける。まさに、ここにおいて、無明は一つの焦点に聚集し、一切の出口が切断された為に、それは外へ向かって流れだす事ができない。それ故に、それは、心の内部へと、聚集してくるのである。

無明の出口は、目、耳、鼻、舌と身体、色、声（音）、香、味と触の感触を齎すものである。ひとたび、念住と智慧が、十分に熟練して、永遠にこの出口を切断するならば、無明は、出口を失って、顕現する事ができなくなる。その外部的な代理（+的行為）は、解除されて、残るのはただ、心の中において、不断に、微細に、振動し共鳴するばかりである。活動の出口を奪い取られた為に、それは、心をば、活動の根拠地にするしかなくなる。智慧が、いまだ全面的に、それを超越できないのであれば、無明は微細な楽受、微細な苦、及び一つの真正なる威厳のある驚嘆的な光明として、顕現する。このような事から、心は引き続き、これらの要素の関する観察を、続けなければならないのである。

一切の世間的眞実——どれ程に精緻で、またはどれ程光明で、宏く偉大に見えても—それは不可避免的に、一種の、不規則的な兆候を、顕現する。これら（+の存在）は、心をして、注意を向けさせしめ、回答を探し求めさせるのに、十分に足りる。完全に、心の中から生起する所の、この二つの非常に精緻な楽と苦、及び、そこから流れ出て来る所の、あの驚異的な光明は皆、無明を根源としている。

しかし、我々はこれまで一度も、それを見たことがないが為に、初めてこの点を観察する時、我々は愚弄されて、それに緊密に執着してしまう。我々は、無明に嘲笑され騙され、催眠され、その微細な満足感と発光する光明が、名と相を超越しており、それが我々の真正なる本性であるのだ、と信じてしまう。錯誤を察知する事ができないまま、我々は、この宏くて偉大な、しかし無明を含むこの心を、我々の真正なる自己だ、と思い込んでしまうのである。

しかし、このレベルにおいて、程なくして、大念住と大智慧の強大な機能は、不満足を覚え始め、彼らは例外なく、不断に前後を子細に点検、観察と分析をし始めて、最後には、彼らは、真相について、覚醒する。彼らは、この微細な楽受と苦受が、軽微ながら、変化を顕現する事に気が付き、あの宏く偉大な光明と調和しない、と思う。苦がそれほど軽微に、己自身に顕現する時、それはすでに、疑いを引き起すには十分である；なぜに、心は、このように変化するのであるか？それは恒常不変ではない。

心の光明の中において、これらの、微細な不規則性を発見したならば、それは、実は、微細な波動を顕現しているにすぎないのだが、念住と智慧の注意を引く付けるには、十分なのである。ひとたび、それらが発見されると、不信の感覚が生起する。智慧に警告を与えて、それらを観察するように促す。故に、心の能知は、観察の焦点となる。

念住と智慧は、この一点に専注して、この能知が一体どのような構造を持っているのかを、明らかにしたいと思う。それらは、一步また一步と、その他のあらゆる事柄を観察し、すべての要素を消去する事に成功を得るレベルに、到達する。しかし、それほどまでに光明であり、それほどまでに驚異的な能知：それは一体なにものなのか？念住と智慧が、注意力でもってそれを凝視し続ける時、心は、全面的に観察される焦点となり、大念住と大智慧の戦場となる。

暫くすれば、あなたは破壊することができる——無明の立場から言えば、あれほど宏く偉大で壮観であった所の——無明——心を。それらは、今まさに、それを徹底的に破壊し、最も微小な痕跡をも、心の中に残す事はない。

その本性が、はっきりと、明確に知られるまで、鋭利で、直接的な智慧によって観察すれば、この現象は、完全に予期していなかった方式でもって分解され、崩壊する。この時の開悟は、”菩提樹下の証悟” または ”輪廻の墳墓の徹底的崩壊” と言うことができる。そして、全くの疑いの余地の無い、証悟と確信が生まれる。光明の中心が分解されたその刹那、ある種の、更に非凡なる——過去においては、無明によって覆い隠されていたもの——が、暫くすると、全面的に顕現してくる。心の中において、それは、強烈な振動が、宇宙全体を、揺らしているかのように、感じられる。

心が一切の世間的事実の相から分離されたこの重要な一刻、描写する事が難しい震撼と、莊嚴が存在する。まさにここ、ここにある——無明が最終的に消滅するその一刻——阿羅漢道は、阿羅漢果に転化する。道がすでに、円満に完成する時、すなわち、阿羅漢の果位を、証悟したのである。法と心は、すでに円満を証得した。その時から、すべての問題は滅し去った。これが涅槃の本性である。

我々が想像していた、あれほど人をして敬慕・畏怖、驚嘆させる所の本質が、最後に分解された時、ある種の不可思議が、全面的に生起したが、その本質は、徹底的な清浄であった。それと比較してみるに、我々がかつて、あれほど敬慕・畏怖し、緊密に執着していた無明は、まるで牛糞のようであり、無明によって覆い隠されていた所の本質は、純金のようにであった。どのような幼児であっても、牛糞と黄金のどちらが貴重であるかは、分かるのであって、故に我々は、今頃になってみともなく、その両者を比較する必要もないのである。無明の分解は、阿羅漢道と阿羅漢果が同時に、それらの終着点に、到達する事ができるのだ、ということを現している。

たとえば、階段を登って、部屋に入るのを例にして比較するならば、片方の足が、部屋の中の地面についていて、もう片方の足がいまだ階段の上にあるのであれば、我々の両足は、いまだ部屋に入った、とは言えない。唯一、我々の両足が、しっかりと部屋の地面を踏みしめた時、我々は初めて、”家に到着した”と言える。心の両足が、至高で、無上の法の上に、しっかりと根付いた時、それが ”法の証し” である。

涅槃の殊勝さを証得し、証悟したその時から、心は、徹底的に自由になる。それは二度と、煩惱を滅し去るための活動をしない。これは阿羅漢果：阿羅漢の果位である。それは唯一、煩惱からの解脱者——あれら有余涅槃を証得し、かつ生きている阿羅漢——によって体験されるのである。色、受、想、行と識に至っては、それらはただ、同時に生起し、滅し去る状態、自然的現象にすぎず、如何なる方式をもってしても、心を攻撃したり、心を汚染したりする事はできない（+事が知れる）。

色、声（音）、香、味と触もまた同様で、それらは各自各々の事実であり、それらの存在は、すでに心に、問題を齎すことはない。これより以前、無明が心に対して、錯誤的な認知を引き起させていたが、今、心は、無明より解脱した。今、心は、真相を十分に覚知して、それはそれ自身が知っている真相を知っていると同時に、また、内外における、一切の自然現象の真相をも、知っている。それらは、それぞれに、別々の真実を擁しており、それ以前にあった、彼此の間の矛盾は、二度と存在しなくなり、それぞれが、各々己自身の道を歩むようになった。この段階において、煩惱と心の間、長期に亘る衝突は、すでに過去のものとなったのである。

このように真理が明白になると、心は五蘊の生と死に対して、二度と憂慮したり、危惧したりしなくなった。心はただ、五蘊の活動——それらがどのように生起し、どのようにお互いに影響を及ぼし合い、どのように滅し去るのか、また、最後の死亡の時、それらがどのように分離するのかを、認知するだけである。心の、知る、という根本的特性は、永遠に不死であるが故に、死を恐れる事はない。死亡がやってきた時、彼は死亡を受け入れる；生きている間、彼は生命を受け入れる。両者は同一の真理の、二つの側面なのである。



心の観察の終り

このレベルに到達すると、心は永遠に、生と有を切断し、徹底的に、一切の無明と貪愛の顕現を、切断する。”無明の縁によりて行あり”——根本的な無知が、有為の生起を形成する——そのような境地は徹底的に滅し去り、かつ溶け去った。それは ”無明の滅する時、行滅する”——において滅せられ——縁起の離散・消滅は、苦の聚を滅する——に取り替えられた。無明が滅し去った後、苦を齎す縁起もまた滅し去り、それらは、心の、知るという特性の中で、消失した。

五蘊の構成の元となる縁起、たとえば想は、引き続きその領域内で運用されているものの、しかし、二度と苦を齎したりはしない。それらは二度と、煩惱の汚染を受ける事無く、ただ心理的な活動を構成して、運用されるに過ぎない。識は、心の中から生起するが、単純で純潔なため、苦を生じせしめない。”識の縁によりて名色あり。名色の縁ありて、六処あり。六処の縁ありて、触あり。”

一切の感官の媒介と、それらの所縁による触は、ただそれらに内在する所の特性に従って、自然に発生する現象である。それらはすでに ”純大苦聚滅” の仕事を完成させた心に、マイナスの影響の類を、生じさせる事はない。無明と、すべての煩惱が滅し去る時、それらは心内において、滅する。無明の消滅は、生死輪廻の消滅を意味しており、両者は必然的に心内において消滅する。というのも、無明——心は、輪廻世界の核心であり、また、生、老、病、死の核心でもある。愛欲は、無明を主要な推進力として、

生、老、病と死の根源であるが——しかし、それは心内にのみ存在するのである。無明が最終的に崩壊し去って、永遠に心の内において切断された時、徹底的な消滅が訪れる。

心は、これより以降、自由になる。広大無辺の空、界もなく、垠もない——徹底的に広々としていて、制限もなく、障碍もなく、一切の矛盾もまた、消滅する。心は知っている、それはただ、真理のみを、知っている；それは見る、それはただ、真理のみを、見る。これが真正なる、空（クウ）である。

空（クウ。以下記載のないものは同様）のレベルにおいては、色々な、異なった体験が許される。サマーディは、その内の、一つのレベルである。高く深いサマーディの中で、身体と思惟心は、暫定的に、覚知の中から消失する。心は空を顕現するが、しかし、この空は唯一、サマーディの境地の中においてのみ、維持される。智慧の修行の初期においては、心は、永恆的に己と身体を分離することができるものの、しかし、いまだ個人の心理的構成：受、想、行と識から脱離することができない。それは徹底的に色身において空であり、故に、身体の影像・イメージは、二度と心内に出現することはない。が、しかし、それは心理的概念においては、空になっていない。

この段階にまで修行すると、智慧は、すでに、己自身と、身体というこの物質的構成を、分ける事ができるようになっているが故に、身体を自我（＝エゴ、己の所有物）だと思いついで、永遠に信じる、というような事は、なくなる。しかし、それはいまだ、受、想、行と識の、心理的功能を分けることはできない。

観察を続けていると、心は、これらの心理的功能に、二度と執着しなくなる。この時、宇宙全体に影響を及ぼす所の特別な光明以外、無限の光明のように見える存在以外、また、人をして驚かす所の、深刻な心理的＜空無＞以外、何もかも残らなくなる。これは真正、無明が人によって敬慕・畏怖される所の、力である。

引き続き、念住と智慧を最大限發揮して実践する修行において、最後には、無明が、心の中から消え失せて、心に浸透していた所のものは、すべて取り除かれる。この時、一つの真正なる空が、証得される。この段階において体験される空は、徹底的であり、（+ものごとの）関係性から永遠に離脱しているものであり、それを維持するのに、如何なる努力も必要としない。この事は、心の真実と、絶対的解脱を意味している。

無明——心の空と無明からの解脱——清浄心の空、二者の異なるところは、一人の人間が空（＝からっぽ）の部屋にいる様子を想像することから始めるのがよい。その人は、部屋の中央に立ち、部屋の空（＝からっぽ）であることに敬慕・畏怖を感じている。

彼は、己自身のことは忘れてしまっている。彼は、部屋の中、彼の周囲になにも物が無いのを見て、己自身が知り得る所の空（＝からっぽ）についてのみ考慮し、己自身が占拠している所の、部屋の中央の空、からっぽかどうか、気が付いていない。

人が部屋の中にいるならば、それは真正なる空（＝クウ、からっぽ）ではありえない。彼は最終的に、彼が部屋から出て行かない限り、部屋の中は、真正なる空（＝からっぽである事）では有り得ない事に覚醒するが、その時こそが、無明が分解され、清浄心が生起する時である。

ひとたび、心が一切の現象を手放す時、心は極めて（+高度な）空に変化するが、しかし、空を敬慕・畏怖する、空の威厳に摂取されたその人は、未だ存在する。無明の本質、（+存在の）拠点としての自我（＝エゴ、エゴ意識）は、いまだ心の、知る、という特性の中において融合していて、これこそが真正なる無明なのである。その時、個人の ”自我” は真正なる障碍となるが、ひとたびそれが崩壊して消失するならば、障碍は、綺麗さっぱりなくなる。

一切は空である

外の世界は空であり、心の内在も空である。ちょうど、あの空っぽの部屋の中にいる人間のように、彼がそこから離れて初めて、我々は真正に、部屋は空（＝クウ、からっぽ）であると言えるようなものである。心が、外部にあるすべての事物、それ自身に浸透する所の一切の事物に対して、徹底的な理解を得て初めて、心は徹底的に空になったと言える。

一切の世間的真実の痕跡が心からすべて消失し去った時、真正なる空は発生する。無明の消滅と、この段階に至る直前に、我々が観察し得た所の、その他の事柄は、完全に異なっており、その他の事物の消滅は、それらの真正なる本性に対する明晰で絶対的な理解から来ている。無明の光明は、一瞬のうちに消滅する。それはちょうど、稲妻の閃光のように、瞬いて後、即刻、消え去るが、その様子は、非常に独特である。

存在の瞬間は突然発生する

それは身を翻した後、徹底的に消失する。唯一、そのような事が起こった後に、無明は消えるが、その時初めて、我々はそれが真正なる無明であった事が、分かるのである。残されたものは、純粋な独一无二（＝二つはない、一つしかない）で、その本質は、絶対的清浄である。それ以前において、体験した事はないものの、しかし、それが出現する一瞬のその時、どのような懷疑も出現することはなく、いかなる懷疑をも引き起しそうなものごとは、この出現によって解消される。一切の負担・重荷の終焉である。

一切は自我を隠匿している事、自我の存在は本質的な表現である事、これらは皆、無明の作用による。これら表現の存在は、真正なる無明がいまだ原住所から一步たりとも、動かない事を意味する。（+我々が実践する）一切の観察は、すべてこの問題（+を解決する為）である。

この自我とは能知者（＝知る者）である：

この自我は、理解し了解することの出来る者である。この自我は放光し、輝いていて、楽しいものである。”私” と ”私のもの”——真正なる無明は、ここにおいてこそ、ある。一切は、そのために為される。ひとたび、それが最終的に崩壊したならば、自我の認識もまた、それと共に去って行く。ものごとは依然として進行するが、しかし、誰かのために進行する訳ではない。

これはちょうど、底の抜けた缶のようである：

どれほど多くの水を入れても、一滴も残ることはない。思想（＝考え）と意見は、蘊の自然な機能として、引き続き生起し、また滅し去るが、しかし、何らかのものが心に粘着する事がない。というのも、あの、それらを盛るための器——無明——は、すべて破壊されたが故に。

一つの念頭（＝思いつき）がこの一瞬に生起するが、次の瞬間には滅し去る。というのも、それらを盛るための器、盛るためのものが存在しないし、また、それらへの所有権を主張する者もないが故に、念頭は、ただ通過して、後に消滅する。自我が、徹底的な空（クウ）であると知る時、その本性は、徹底的に満足する。この本性とは、真正なる絶対的清浄であり、一切の負担・重荷から、徹底的に解脱している。

心の真正なる本性が、無明によって、かくの如く、完璧に覆い隠されている時、真正なる心の、あの不可思議で、微妙なる神奇を見る事ができない。無明の陥穽と偽装は、これほどまでに巧みで、禪の修行者は、この段階に来るや否や、みな、愚弄され、催眠によって、これが心の、真正なる神奇である、と信じ込んでしまう。彼らはそれ程までに、それを大切にし、一切の代価を惜しむ事なく、それを守り、維持しようとする。実際、本質的に、それは、彼らの真面目であり、この人をして驚嘆させる所の光明は、彼ら自身に属するものである。

真正なる無明の内側には、多くの、殊勝で神奇なものの焦点が隠されている——我々が想像もできないものが。これら、人をして汚染されうる要素は、ちょうど、少量でも十分に動物を殺す事のできる、毒餌と同じである。概念化された事実でもって、無明の中に隠された、あの汚染の要素を譬え話としても表現する方法を見つける事ができない為、私はただ、簡単な説明だけ、したいと思う。

これらの要素は、以下のようなものを含む：存在する一つの光明。それはそれほど殊勝で、最終的な果証のように見える：一つの、最も殊勝な快樂の感受。心に浸透する所の、光明の力を源として、世間的実相における領域全体を超越したかのような感受：一つの、決して打ち壊される事のない感覚。それほど堅固で、それに影響を及ぼすものなど、何もないと感じるほどの感覚：この発光する本質に対して、貴重だと思ふ気持ち、保護したいという執着の気持ち、それを純金のようにだと思ってしまう気持ち。

無明——心はまるで一切の功德を擁しているよう（+に錯覚する）：それは光明であり、それは無畏であり、それは比類ない程自足しており、また、その能知（=知る者）の品質は、無限のように思える。しかし、それは（+己自身が）想像できる所の、一切を知る事ができるものの、この能知の特性は、己自身を知る事はなく、これこそが、真正なる無明の、根本的無知である。

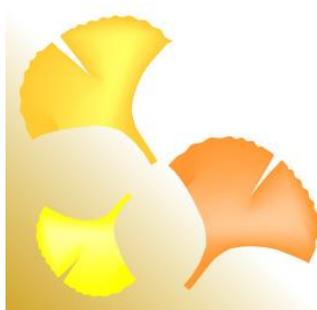
ひとたび、この能知の特性が、翻って己自身を見るならば、無明は崩壊する。この崩壊の発生は、心の真相、法の真相の発露である。過去においては、無明がこの実相を覆い隠して、見させないようにしていたのである。いまだ真正に、智慧の領域において成熟していない禅修行者は、無明から離脱するには、困難が伴う。というのも、一般的な無明と、真正なる無明は、完全に異なるが故に。

一般的な無明の本性は、一切の虚妄の、異なるレベル・局面であり、外部も内部も含まれた、一つの心理的汚染に統合されるものである。我々が譬え話として話す時、それは葉、細い枝、枝、幹の統合したものである、と表現される。一方、真正なる無明とは、倒された樹木、すべての枝が取り払われた樹木のようなものである。言い換えれば、不断の努力によって、智慧が、無明の外部的に存在する末端の枝葉の活動を切り取って、徐々にではあるが、それが茂らないようにする事によって、それは圧迫されて一点——心——に聚集する。

この時無明は、それが全盛であった時期に、使いだてしていた（+反動的）仲間を、二度と擁することはなくなった。この時、我々は真正なる無明を発見する。無明の枝は、各種各様で、その他の心理的汚染の一切は、その細枝と分枝に過ぎない。我々は、枝に専注して、根源を粗略にし勝ちである。故に、実際に無明に到達した時、我々は混同して、かつ、それを認知することができない。

それはちょうど藤の蔓のようで、一か所から成長するが、地面に沿って四方に伸びて行く。それは不断に四方に向かって蔓延すると同時に、上に向かって這い進み、ますます枝分かれして、伸びれば伸びるほど、絡まって、何が何だから分からなくなる。我々

は、藤の蔓をしっかりと握りしめると同時、根の方向に向かって、それに付き従って行き、最後には、主幹を見つけ、ここにおいて、根を探し当てるべきである。根を見つけ出して、その全体を引き抜いたならば、それは、死ぬ。



阿羅漢果：法の震撼の内に落涙する

2002年5月2日アチャン・マハー・ブーワ尊者89歳の開示

<死>の真相は、まさに、心の中に存在する。

死と生は、皆、ここにおいて、ある。

心自身には、生もなければ、死もない。

それは、煩悩が、心の内に浸透して、我々をして、不断に、生死輪廻せしめているだけなのである。

あなた方は、分かりますか？

この一粒の心をみなさい。

もし、あなたが、心の毒性を見る事ができないのであれば、あなたは、これら煩悩の毒性を、見ることはできない。

修行が、最高のレベルにまで到達した時、あの、人をして迷わせて、また発光する所の、心そのものが、真正なる危険の所在地となる。

故に、心にどれだけの宝や神奇が隠されてあるなどと、夢想してはならない。

実際には、その中には、大いなる危険が潜伏しているのである。

あなたが、このような角度から、心というものを見る事ができるならば、心の中に埋蔵されている所の、危険性を見ることができる。

あなた方は、私の言っている意味が、分かりますか？

発光する心を、それほど崇高に、思い続けるならば、あなたは、その袋小路に、閉じ込められる。

問題は、これほどシンプルである。

私が警告しなかった、などと言ってはいけない。

時がくれば、あなたは、一切合財を掃除し払う事、少しも残すことなく、何も残さないように。

すべての、あなたが触れたことのないもの、それが、最も大きな危険なのである。

ここまで話をしている、私はダンマ・チェディ山寺 (Wat Doi Dhammachedi) での修行を思い出した。

その時は、午前の朝食前で、私の心は、人をして注視できないほどの、驚異的な質を擁して、私の全体は、全くもって、それに摂取されてしまったのである：

” おお、天よ！ どうして、心は、これ程に光り輝いて、人を驚嘆せしめるのか？ ”

私は経行道に立って、この光明について考え、思惟したが、それがなぜ、これほど人をして、驚嘆させるのか、信じ難い程であった。

実際には、私を驚嘆させた光明は、最終的な危険性を代表していたのである。

あなた方は、私の観点を、どのように理解しますか？

我々は、非常に容易に、この光に騙される。

実際、私はそれに幻惑され、騙されたのである。

すべてのものがきれいさっぱり清掃された後、我々は、注意力を、この最後の焦点に合わせる・・・この事を、知っていなければならない。

実際、それは、不断に生死輪廻する所の中心——我々は ” 無明 ” と呼ぶ——の根本的な無知が、顕現する状態なのである。

この焦点は、無明の最も深くて細やかな境地であり、心が輪廻する所の、最高の突出点、ピークなのである。

この段階において、(+私の内に) 何ものも残っていないが故に、私は、この無明の輝くばかりの光明に、感嘆してしまった。

あの光明には一つの焦点があり、それはちょうどガス燈のシェードのようで、シェードは光を発して、周囲を明るくする。

これが問題で、それはそれ程に神奇で、私をして震撼せしめ、敬慕・畏怖せしめ、そしてその結果、私は懐疑する事となった：

” なぜに、私の心は、これほど不可思議な程、明るいのか？ ”

それは、すでに、完全に、輪廻の世間を超越しているようであった。

ほら！これが、私が修行の最終段階まで来た時に、無明が展開した所の、壮観な力であった。

私はあの時、己がすでに、無明が働く詐欺の局面に落ち込んだ事に、いまだ気が付いていなかった。

突然、何の予告・警告もなく、一つの法語が自然に浮かびあがった：”如何なる所にあっても、能知に一つの点または一つの中心がある時、それは存在の核心である。”

それはちょうど、ガス灯のシェードが、発光する中心点のようであった。

ほら！それは確実に、私が知るべき事柄を、教えてくれる：

これこそが、存在の核心である事を。

このようであったものの、私はその意味を掌握しかねていて、私は迷い、惑わされてしまったのである。

一つの点、一つの中心・・・その意味する事は、この光明の、焦点であったのである。アチャン・マンが遷化して後、私はその ”点” を観察し始めた：どのような場所においても、能知に、一つの点または、一つの中心があるならば、それは存在の核心である。

もし、彼が、いまだ生きていたのであれば、彼は、私の困惑を、今すぐに指摘してくれただろう。

それこそが、あの光明の焦点なのだ！

(+それを知ったなら、その後) その点は、<今・ここ>において、崩壊し粉々になるであろう。

ひとたび、私がその意味を知ったならば、私はその危険性も知ったであろうし、また、それを消滅させたであろう。

結果的に、私はそのようにしなかったし、それをば、小心翼翼として、保護したのである。

究極的な危険が、その時、そこにあった。

究極的な危険なく点とは、世間的実体の全体を創造する所の、光明の核心であった。

私は、永遠に忘れない。

あれは二月のことで、アチャン・マンの遺体が、茶毘に付されたばかりの頃であった。私は山に入ったが、この部分が瓶首となって、(+修行が) 行き詰まってしまったのである。

それは徹底的に、私を惑わした。

私は心内に浮かんだ、あの法語から、何かを得ることもなかった。

それは、強大な恩恵を施してくれることもなかったし、却って、私を苛む巨大な虚妄の一部分となった。

私は混乱した：

”この点は何だ？”

それは当然の如くに、あの光明の点であったのではあるが、しかし、私はこれまで光明の中心が、高度の危険性を持つものだ、という事を予期した事がなかった為に、私は久しく、それをば、究極の功德だ、と思いなしていたのである！

煩悩は、このようにして、私をば、騙したのである。

私は、それが極めて危険であるという、警告は受けていたのではあるが、しかし、それは、なお、私をば呪詛して、私を惑乱し、私をして、あれは究極の功德であると、信じせしめたのである。

私は、この矛盾が、如何に私を苦しめたかを、決して忘れることはない。

その後、私は山寺を下りて、スリ・チェンマイ県の瓢村（Ban Pheu）地区に行き、森林の奥にある Pha Dak という洞窟に住んだ。

ここには三か月程いたが、その後、心内に、いまだ解決できない所の、重苦しい迷いを抱いたまま、元の山寺に戻った。

最後に、この山の背に住んでいる時に、問題はようやく、解決したのである。

この決定的な時が到来した時、時間と空間に関する事柄は、淡くなって行って、それとは完全に関係がなくなった。

出現したのは、心という、燦爛とした、自然な光明で、私はすでに、更に重ねて、観察に供する何もものも持っていない程の、修行の段階を迎えていた為、私はすべてを放棄した——あの光明だけが残った。

心の中の光明の焦点以外の、宇宙全体をば、すでに確実に、疑いも無く放棄した。

あなた方は、私の言っている意味を、理解できますか？

この<点>は、極端に危険なのかどうか？

この段階において、大念住と大智慧は聚合して、心の焦点に集まった。

この<点>を、全面的に観察しようとして、すべてのエネルギーをこの<点>の上の集めて、それが私に答えを与える様にと、要求した。

私はすでに、この段階まで修行していたので、なぜ心がこれほどに、色々な状態になるのかを、訝った。

私は心の、色々な状態に対して、すでに知っている、既知の事柄だと、広言する事ができたが、しかし、すでに知っている所の、心の、一つひとつの状態というのは、変化した・・・それは私に捉えられる前に、はや変化するのであった：

この状態は善であり、次の状態は悪であった。

あの<点>を観察、專注し、分析して、(+疑問を)明らかにしようとした：

”なぜ、たった一粒の心に、どうして、これほどまでの異なる状態が生じるのか？

それは少しも、統一されていないではないか。”

大念住と大智慧が、最も精緻で微細なレベルにおいて、手を携えて、共同で働くために、二者が合わさった力は、心の一切の、いかなる微細な変化にも対応することができた。心の、どのような状態を観察する時でも、出現する可能性のある変化を、明確に知ることができたのである。

この一瞬、それは光明になり、次の一瞬には、暗淡になる。

” どうして、この様な状態が起こるのか？

変化は内部から生じている。

ほら！今、私はそれらを追いかける事が出来る様になった。

この一瞬は楽であり、次の一瞬には苦になる。”

世俗諦のレベルでいうと、この状態は、必要不可欠な一部分でもある。

というのも、その他の、観察を必要とするものがない為、大念住と大智慧は、変化を生じている<点>に、直接、專注するからである。

この一瞬は楽、次の一瞬は苦；

この一瞬は光明、次の一瞬は少し暗淡。

しかし、あなた方は知らなければならない。

この、楽から苦、または光明から暗闇への転移は、非常に微細であり、その微細さと言え、わずかに覚知され得る程度である事を。

とはいえ、大念住は、時々刻々、それと共にあるのではあるが。

” 心はどうして、これほど色々に変化するのか？”

このポイントにおいて、念住は、他の一切の仕事を放棄して、すべての注意力を、この最も主要な嫌疑に注ぎ、全面的に観察し、それを、心に集中させる。

それらはすべて、相互に関連し合っているのであった。

この最高のレベルにおいては、大念住と大智慧は、同じく極めて微細であり、それらは例外なく、一切に浸透して行った。

この最高のレベルにおいて、最終段階に到達するための自動念と自動慧と、大念住・大智慧とは、異なるものである。

自動念と自動慧は、作意することなく、共に運用されるが、それらは、連続した段階でものごとを観察し、対象をひとつ又ひとつと、断片に切り刻む；しかし、最高のレベルでは、大念住と大智慧は、同じように作意なく運用するのではあるものの、しかし、それらは同時に、一切に浸透する。

あの時、すなわち、それらが心の焦点の核心を点検している時、あの ” 能知 ” の小さな点を除いて、その他の一切は、すでに点検され、捨棄されていた。

今、ここにおいて、明確になったのは、楽と苦を発する所の根源であり、光と闇——この二つの異なったものが、同じ源から発生している事である。

なぜ、一粒の心に、それほど多くの性質があるのか？

次の瞬間、突然、一瞬間において、法が問題への回答をした。

一瞬——本当の一瞬の間！

これを ” 法が心中から生起する ” と言う。

煩悩が心中から生起するのは、我々のエネルギーを束縛する為である：

法が心中から生起するのは、我々にとっての束縛からの解脱である。

法は、突然、意外にも生起したが、それは心の内において、直接呼びかけるものであった：闇であっても、光であっても、楽であっても苦であっても、このすべての二元は、無我である！ああ！

最後において、無我が、これらをば、何の苦労もなく、滅し去ってしまった。

この最後の、疑いのない覚醒は、三つの相の内のどの相であってもよく、それは個人の根機と凜性による。

私は個人として、無我である。

その意味は非常に明確である：

すべてを手放せ！

それらはすべて、無我であるが故に。

突然、これらの異なる状態——闇、光、楽と苦——が、すべて無我であると領悟した時、心は徹底的に、静止した。

明確に、＜一切皆無我＞の結論に、到達したのである。

それは二度と手品をする余地は、なくなった。

心は、このレベルの法の上において、静かに止った——それは、中立、静止であった。

それは、＜我＞とか＜無我＞とかに興味がなく、楽または苦にも興味がなく、光または闇にも興味がなく、心はセンターに安住して、平等であり、安寧で静かであった。

それは大念住と大智慧の中立性を保持していたが、それは、あなた方のような、愚かで、目を開け口を開けたまま茫然としている、お馬鹿さんの中立とは異なるものである。

世間の立場から言えば、それは散漫として、專注していないように思えるが；

実際には、それは前面的な覚知であり、心は静止の中に宙ぶりの状態で浮かび、不動の状態にあるのである。

そして、この平等で、不動の心、存在の根本——知る、という核心——は突然分離して脱落した。

光と闇等の一切合切は、突然、何の苦労もなく、炸裂して粉碎され、最後には、無我に戻って行ったのである。

無明が、心から反転して転げ落ちる時、虚空は崩れ去り、宇宙全体は歪み、炸裂し、崩壊した。

現実的には、無明が我々をして、不断に輪廻世界に流転させるのであるが、それゆえに、無明が心の中から分離されて、消失した時、感覚の上では、宇宙全体が、それと同じくして、転げ落ちて、滅し去ったのである。

大地、虚空——は、同じその一刻において、粉碎される。

あなた方は、理解できますか？

この決定的な一刻、ジャッジする人間はいない。

その時、自然法則自身が生起して来て、ジャッジする。

世界は己自ら傾き、崩壊した。

この事が発生する源は、心の平等なる境地から来るものであり、一切は突然すぎるぐらい突然であった：

一刹那において、宇宙全体が、身を翻し、そして消え去ったのである。

それは、それほどに光明であった！

おお！天よ！

真正に壮観で宏く偉大であった！

あまりのことに、言語で表現できはしない！

これが、今、私が教え導いている所の法の、その、人をして驚嘆せしめる本質である。

私は、このことを体験している時、涙がこぼれた。

今でも、涙がこぼれて止まない、ほら！

今になってもなお、私は当時の状況を思い出す度に、涙が流れて止まないのである。

これらの涙は蘊の作用であるが、当時の、あの純粹で清浄なる自然な境地においては、それらは存在する事はない、ということを知らねばならない。

あの不可思議で、荘嚴で、宏く偉大な自然的境地が突然出現したので、私はあなた方のような、自尊心の強い人間を、仏世尊の法の真正なる様を領悟させねばならないなんて！

おお！本当に、本当の震撼したものだ！

天よ！涙が泉のように溢れて来る！

私は震撼の中で述べた：” 仏世尊も、このように証悟したのだろうか？彼もこのように証悟したのであるだろうか？真正なる法とは、こういうものであるだろうか？”

この事は、私がこれまで一度も想像したり、予想したことのない事柄であった。それは、全くの予告も、警告の余地もなく、一刹那の内生起したのである。

おお！不可思議な震撼！

あなた方は、ごらんなさい。

それを思い出す度に、震撼して、涙を流す私を！
あの記憶は、依然として、鮮明に心の中に存在し続けている。
あの時以来、それは保ち続けられている。
その時、私の全身は、震えた。
この出来事を説明するのは、非常に難しい。
一切は、同時に発生した：天が崩れ落ちて、世界は消失した。
その後、私は絶え間なく繰り返した：“何が起こった？
仏世尊も、この様に証悟されたのだろうか？”
実は元々、質問など発さなくてもよかったのである。
というのも、私はすでに、己自身、自ら真理を証悟したのであるから。

”真正なる法というものは、こういうものなのか？
真正なる僧（＝サンガ、以下同様）は、こういうものなのか？”
三者は皆寄り集まって、一つになった。
一つに合して、至高で無上の法——私はそれを法界と呼ぶ——になった。
”一体、どういう事ですか？仏世尊。
法と僧は、なぜ一に合する事が出来るのですか？
それは同じものなのですか？”
私はこれまで、そのような可能性を想像した事がなかった。
私が大人になるまでに、知った事といったならば、心内の印象では、“仏は仏、法は法、僧は僧”であった。
しかし至高で無上の法が光の中で生起して、この三者は合体して、同じ性質——殊勝なる法の真正なる性質——を持つに至った。

それが、それ自身の中の、光の内から生起して、あの隠蔽された所の、私が以前知ることのなかった真相を、突然、目の前にさらけ出して見せてくれた。
私は虚妄な幻想を物語って、人を騙すような事をしない。
今に至っても、あの殊勝な法は、私をして、感動せしめ、震撼せしめるのである。
それは至る処に存在して、光明は、法界を遍く照らし、一切を顕示して、どの様な法であつても、二度と隠匿され、覆い隠されるものはなかった。
次には、善悪の果報及び天堂（＝天国、天界）と地獄の存在が、非常に明確に、また反駁できないほどの力でもって、私に突撃してきた。
私は、この力が、あなた方のような懷疑者に対して、私に向かってきたのと同じくらい
の力でもって、あなた方を震撼させてくれればいいのに、と期待する。
あなた方、これら煩惱によって騙されし者は、悪業と善業には果報がある事、また、天堂と地獄の存在を信じない。

無始以来、それらは一切に滲み渡って存在しており、ただ、あなたが、いまだそれを察知できないでいるだけなのだ。

あなた方は、理解できますか？

これらの一切は、存在しており、愚かで無知なために、これらを信じない人々は、常に傷付いているが、彼らは煩惱に騙されて、永遠に真理を瞥見する事ができないのである。

<地獄の火より熱いものはない>

通常、五種類の最も重い罪があって、それは五つの地獄の火と相応する、と言われる。その五種類の罪とは：母親殺し、父親殺し、阿羅漢殺し、仏身から血を流させる事、サングの和合を破る事、である。

この五種類の悪業が、心の中において存在する事を知っていれば、証悟のその一刻において、それらは非常に明確に顕現して来て、天堂（＝天国、天界）がどこにあるのか、地獄がどこにあるのか、などと質問する必要は、なくなるのである。

仏陀は妄語・虚言しない。

彼は、これらの事柄を、明確に知っている。

彼は、己自身が見たように、これらを描写することができる。

ああ——！

この至高で無上なる法は、それほどまでに殊勝であり、不可思議であり、信じがたいものであるが、それは絶対的に、中心の一切を含んでいて、証拠・根拠がこれほどまでに明らかである時、一体どのような質問をすればよい、というのであろうか？

この決定的、徹底的な真の相と心は、調和して一に合致するが為に、もはや質問などしなくてもよくなるのである。

次に、私は注意力を、私の過去生に転じて、視てみる事にした。

単純に、私がかつて、何度も生まれ、何度も死んでいると思うだけでも、恐ろしく感じるのに、私は多くの生において、地獄にいた事があり、多くの生において、天上にいたり、梵天界にいたりして、その後に、地獄に落ちるという風に、それはまるで、階段を登ったり、降りたりしているようなものであった。

しかし、心は、永遠に死ぬことはない。

あなたは理解できますか？

心は、永遠に死なない。

業は、心の内に埋め込まれていて、善業が心を牽引して、天の昇らせたり、梵の境界に昇らせたりする。

その後に、善業が尽きると、隠れていた悪業が、心を牽引して、地獄に至らしめる。

心は、まるで登ったり、下ったりする、階段のようだ。

分かりますか？

事はこのような有様であるが故に、目覚めて、しっかりと注意を払わなければならない！

今日、私は、一切合切、公開して話をした——私はあなた方の目の前で、涙さえも泉のように流した。

これは愚かな行為であるのか、善行であるのか？

あなた方に、考えて頂きたい。

私が、世間に対して行っている教法を、子細に聞くように。

私は、はっきりと言うことができる：私の心には、勇敢という文字もなければ、恐れという文字も無い。

完全に感情というものを超越したが為に。

私は、注意力を、私の過去生の観察に向けた。

おお、なんという事！

もし、この個人の身体の死骸を、タイという、横にも縦にも広い国に並べたならば、その結果は、この国のどこにも隙間などなくなるのだ！

こんなに小さな身体なのに！

私は、どれほどの時間をかけて、死んだり、生きたりしてきたことか！

死んでは生まれ、死んでは生まれしてきた、その生と死を、計算する事などできない。計算できる可能性さえ、ないものを！

私の心念は、世間の、一人一人の、すべての無量の衆生の死骸に向けられたが、一人ひとりの衆生の、それぞれの心には、同じく生死輪廻の歴史があり、この観点から言えば、一人ひとりの衆生は、皆同じなのである。

無尽に、(+輪廻の観察を) 後ろへ後ろへと引き延ばしていけば、一人ひとりの衆生の過去には、数えきれない程の死骸が積み重ねられていて、その状況は、真に、耐え難いものであった。

私はこのようにして、過去生を視てみたが、最後には、嫌悪を覚えてしまった。

おお、天よ！

これほどの回数、生まれ変わり死に変わりしていながら、私はいまだに抗いながら、不断に、一回また一回と、生まれ出ている。

その後に、法の判決によって、私はまたこの種の方式によって、(+人生が) 続いていくなんて！

私はこのように観察する事によって、この世間の本質を検査・点検し、世間がこのようであればある程、私は我慢できなくなった。

私はどこもかしこも、同じ状況に溢れているのを見た。

宇宙全体の内に存在する有情は、全員、コントロールされて、墮落した輪廻の中にいた。

この観点から言えば、一切は、皆、平等なのであった。

この時、私の心中に、予期せぬ失望が、沸き起こった。

私は思った：

”私はどうして、この法を他人に教え、指導する事ができるのか？

指導したとて、一体、どのような意義・意味があるのか？

真正なる法は、このようであるのであるから、それをどのように説明すれば、人々に分かって貰えるのだろうか？

（+余生をこのまま）過ごして、死んでいった方が良いのではないか？”

ほら！見えましたか？

私は喪失感を感じ、法を弘めようとする気力は無くなった。

これはちょうど、逃げ道を見つけたものの、己一人が逃げ切れればよいのだと考えるようなものだ。

私は、他人を指導したとて、何等の利益をも、齎すとも思えなかった。

これは、私が教え始めたばかりの時に、感じたものであった。

ただし、事はいまだ完結してはいない。

私のこの件に関する思慮は、自然発生的に発生して、かつ発展している。

世間の状況を観察すると、私は気持ちが萎える。

私は衆生が、つける薬のないままに、暗黒の中に生存しているのを見るし、彼らは愚かで、かつ無知でもあって、何等の価値もない。

仏陀は、この種の人間を”文句為最者”（paraparama）と呼んだ。

それより根器が少し良いものは、私が見たのでは、”須引導者”（neyya）と、”広演知者”（vipacitaññu）である。

”須引導者”という、この種の人間は、法の教えを受け入れることができる。

彼らは時に進歩し、時に退歩する。

須引導者は、教えを理解する能力があり、また、実践する力ももっているが、しかし、ひとたび散漫になると、大いに退歩、墮落する。

もし、彼らが誠心誠意、修行するならば、彼らは非常に早く、進歩する事が出来る。これらは、彼らの発心の程度によるが、須引導者には、この様な、二種類の可能性が存在している。

広演知者は、不断に目標に向かって前進する。

彼らは墮落しない。

しかし、彼らの進歩は、略聞即知者（ugghaāitaññu）より遅い。

略聞即知者の直観の智慧は、それほどに鋭く、常に、決定的な突破を得られる準備をしており、彼らは、柵の前にいる牛が、柵の扉が開くやいなや、即刻、飛び出していくようなものである。

略聞即知者の、内観における智慧の能力は、一瞬にして迅速に理解して、超越する。すべての衆生は、必然的に、この四種類の根器の一つに属する。

私が、これらの世間の本質を観察した所によると、彼らは彼ら自身の、各々の根器に基づいて、自然に、この四種類に分類される。

私が見る所、上等な根器の者は、私が教えたくないと思っている広大な衆生の中に、いる。

略聞即知者：彼らはすでに十分に、なるべく早く（+己を）度したいと思っていて、準備を完了している。

次に、広演知者であるが、彼らは非常に快速に目標に向かうことができる。

次に須引導者であるが、彼らは横になって放逸したいという思いと、修行に精進したいという思いの間で、抗っている。

あなた方は、私の論点を理解しましたか？

二つの異なった力が、彼らの心の中において、相互に争って、統治権を奪い合っている。

最後に、文句為最者であるが、この種の衆生は、外観が、人類であるに過ぎない。

彼らは、まったくもって、将来の為に、何らかの善行を蓄積する事もない。

この種の人間の死は、尊厳のない死であり、唯一の可能性は、下に向かって墮ちるだけである。

彼らは一生また一生と、一生毎に、更に墮落する。

上昇するための道は、すでに塞がれていて、彼らは如何なる福德資糧も修したり、集めたりしていないため、下に向かって墮ちるより外ない。

この事を、よく覚えておくように！

これは私の心の内から直接流出する教えであり、あなた方は、私の事を、嘘つきだとか、法螺吹きだとか思って（+はいけない）。

徹底的に清浄なる心と比較するに、この世界は、一つの大きなゴミ箱であって、そこには、色々な異なったレベルのゴミが、放り込まれているのだ、と言える。

最高度の略聞即知者から、最低の、最も普遍的な文句為最者まで、すべての存在可能なレベルが、すべて、この一つの大きなゴミ箱に、集まって来ている。

この世間の相対的真相は、よいものも悪いものをごちゃまぜに混じり合ったゴミ箱だ、という事である。

あなた方は、分かりますか？

観察する内に、私はこの大きなゴミの堆積物を、篩にかけて、四種類の異なるレベルの衆生に、分けて見た。

この観察の過程の中で、私が衆生を導く気持ちになれない事に関して、ある種の覚醒が持ち上がった。

人をして、奮い立たせる所の考えが、突然、私の心の中に、湧き上がったのである：

”法はかくの如くに、至高で無上であり、それを証悟、体得できる人はいない。

それならば、私は天人なのであるか？

己自身は、一体何であるのか？

私はなぜ、法を証悟することができたのか？

何か原因があるのであるか？

何が、この証悟を齎したのであるか？”

私は、この事に関連する因と縁について考え、私を証悟せしめた、修行の道について思いを巡らせた。

それは、実際は、仏世尊の教えたものであった：

布施、持戒、定の修習。

これは、私をして、あの場所に導かれることになった道であり、この道以外、その他の人々をそこへ連れて行くことは、できない。

私自身の修行を思い返せば、この同じ道を使って、その他の人々をそこへ連れて行くことはできる。

たぶん、非常に少数の人々であるのだろうけれども、しかし、私は、絶対に、ある種の少数の人々は、この偉業を成し遂げることができるであろうことを、否定はできないのだ、と考える。

私は、弘法は少なくとも、少ないながら、ある種の人々に、利益を齎す事ができるのだ、ということに覚醒し、その覚醒は私に、それら指導を受けるに値する人々に、教え指導するようにと、私を鼓舞した。

その後、僧侶たちが、私の住む森林と山の周囲に集まり始めたので、私は彼らに、確固として修行するように指導した。

徐々に、私の教えは広まって宣揚され、今では各地に伝わっている。

いまでは、人々は、タイと世界の各地から、アチャン・マハー・ブーワが開示する所の、法を聞きにやって来る。

ある種の人々は、己自ら、ここまでやって来て、私の法を聞こうとし、ある種の人々は、全国的な TV 放送でもって聞こうとし、ある種の人々は、インターネットで、私の開示の録音を聴く。

私は、あなた方に保証する。

私が教える法と、私が証悟したものは、一致している。

あなた方は、私の言っている事が分かりますか？

仏世尊がお教えになられたのと、私があなた方に伝達する道理は、同じものなのである。

こう主張するからには、私は大声で叫ぼう：善哉！

勿論、仏陀その人と比べるならば、私は一匹の鼠に過ぎないが、証悟の印可は、私自身の胸の中にある。

私が円満証悟した所の一切と、仏世尊の教えは全く異なる所なく、私の証悟と、仏世尊のものとは、完全に、なんらの衝突もない。

私が教えるのは、私が誠心誠意受け入れてきた実相であり、これが、私がタイの全域に法を教える時、なぜ、これほど潑刺としているのか、という答えである。

世俗的な角度から言うと、私はまさに勝ち残った英雄の如くに、法を開示しているが、しかし、実際は、私の心中における、至高で無上の法には、勇敢とか、畏怖とかというものは、存在しない。

それらには得も失もなく、勝ちも、負けもない。

私の教えは、純潔で、雑染のない、慈悲の心から流れ出している。

たとえば、犬が喧嘩している所を見かけたならば、私は、彼らがそれ以上、咬みあわないようにするし、どちらが勝ったか負けたかという事には、興味がない。

それを気にするのは、犬だけである。

どちらかの犬が咬めば、もう一匹の犬が怪我をする。故に私は、犬を引き離して、それ以上、犬同士が咬みあわないようにする。

ただそれだけである。

法の本質もまたこの様であり、法は、長らく喧嘩し、誰が正しいか、正しくないか、議論において止まることを知らない人々を、引き離し、別けるのである。

現今のタイは、先ほどの私の説明に似ていて、このたとえ話がとても似合う。

法に語らしめよ。

今、私はすこぶる、世に入りて（+活動している）。

今、アチャン・マハー・ブーワ程、世に入る人はいない。

私がこのように言う意味は、私は長らく、世間における犬たちを分けて、お互いに咬みあわないように努力しているという事である。

この間、在家者と僧人たちの行為は、犬と同じ様であって、榮譽のために、お互いに押し合いへし合い、咆哮し、怒鳴り、怒る。

故に、私は彼らに対して法を開示するが、それはちょうど犬を引き離して、平和にさせる事と似ているのである。

法は真理を代表している。

もし、我々が、すべての錯誤を手放すならば、我々の社会の群衆と、仏教を住持する僧団は、平和になり、共存することができる。

しかしながら、すべての犬——よいものも、悪いものも——は、今なお、火花を散らして戦っており、国家は大きな禍に遭遇している。

仏教は、人の心を主要な舞台と見做しており、すべてのタイ人の心の中における、この最も神聖なる大舞台——仏教——が、いまや、犬たちの喧嘩のために、大きな破壊を迎えているのである。

故に、私は彼らに喧嘩をやめて貰いたいと思う。

犬のように喧嘩をしても、何の利益も得られる事はない。

実際には勝ち組も、負け組もないのである。

勝った者も敗けた者も、同じ様に傷付くだけである。

故に、人々は、理知的な行動を遵守し、そこから退出して、論争を止めなければならない。

その様であれば、タイ、またその子・民と仏教は、平和で安楽でいられる。

そうであれば、災難がこの国に降りかかるという事はなくなるのである。

あれら、獐猛で牙をむき出しにして、己が勝者だと喧伝するものは、例外なくみな、敗者である。

その中に、正しい人間などいない。

というのも、喧嘩そのものが、すでに誤りなのであるから。

たとえば、二人のボクシング選手が、リングの中で打ち合いをしたとして、勝つ者も、敗ける者も皆傷だらけ、そんなことが自慢になるはずがない。

私の話は、面白半分なのではない。

喧嘩というものは、双方にとって、更に大きな苦痛と怨恨を齎すだけであり、その結果、意見と観点の戦場となって、理性は吹き飛び、己自身が目立つことばかり考えて、口から唾を飛ばして論戦する。

これらの犬たちは、タイを戦場にしてしまったが、彼らがこのようにあり続ければ、国会は壊滅してしまう。

私が先ほど述べた事柄を、私は各方面においてしっかり考えてみなければならない、と思う。

私は涙を流しながら、タイの人々に聞いて貰いたくて、誠心誠意、話す。

もし、あなた方が、今、紛争を止めるならば、災難が降りかかる事はない。

もし、我々が世間的な角度から、勝利について語るならば、それはまさしく、正直、公平、正義の故に勝利するのだ、と言えよう。

あれら、間違いを認めて、失敗を受け入れる側もまた、正直、公平、正義の故に、勝利者である。

このようであれば、両者は、団結して調和して、手を携えることができる。

あれら怒鳴り合い、罵り合いながら、譲ろうとしない者、彼らの中に、勝者もなければ、敗者もなく、両者は共に、血まみれになるだけである。

この様な事を受け入れられるだろうか？

私はこの様な状況が発生するのを望まない。

タイは仏教国であり、仏教の信仰が、犬のように、お互いを打ち負かすようなもので、血を寺院に持ち込むなどという事があってはならない。

どうか、この一連の狂気なる行為を放棄して頂きたい。

畢竟、地獄、天、梵天と涅槃が、誰が正しくて、誰が間違っているか、誰が善で、誰が悪であるかを、決める。

故に、己が、最も深い地獄へ落ちることなどないのだと、決して思ってはならない。

あれら仏世尊の正法と遠く乖離している所の、自分だけが正しいと思っている観念を發表してはならない。

法の領域とは、天と涅槃であり、それはすべての善人の領域である。

この種の間違った見解は、あなたをば、咬みあって咆哮する犬のレベルにまで落とし、かつ、無尽なる墮落を齎す。

これらの言論は、ただ、血まみれの犬の戦いを齎すだけだ。

この点をしっかりと覚えておくように！

今日、私は思いつくすべての事柄の一切を説明した。

私が、至高無上の法を証悟してから、すでに 53 年経った。

私は本日、あれらの体験を語ったのは、あなた方の利益の為である。

反対もしてはならないし、気落ちしてもならない。

この法は、いつも円満で錯誤なく、それは完璧に、<今・ここ>の状況の中において、己自身を顕現する。

たとえば、今日、それはあれほど力強く己自身を顕現し、アチャン・マハー・ブーワの涙を、皆の面前において、流させた。

これが法の殊勝なる特質の顕現であり、私が大衆を指導するのも、同じ法によっているのである。

私は手前勝手に法を教えたりはしない——私は誠に誠実に指導している。

私はすでに何回も説明した。

私は永遠に、法の為なら、喜んで、命を捨てる事ができる。

私が、私の修行のために、どれほど努力をしたか、誰も信じることはできないであろう。

というのも、その他の人々は、私のなした事を、なした事がないし、彼らは、私が、この至高で無上なる法を証得するために払った、超常の努力を想像する事が出来ないのだから。

私は誠にそれほどに精進し、また、成果を得ることができた。

これは法のために、絶対に妥協することなく奮闘する力が顕現したものであり、祈願の力は、堅固であればある程よい。

その様であれば、たとえ死んだとしても、勝利の死であり、無駄な生き方、惨敗などではない。

この点を、しっかりと覚えておくこと！



阿羅漢の証し：阿羅漢はなぜ泣くのか？

アチャン・マハー・ブーワ尊者 2002年6月17日の開示

<私は>非常に正直にあなた方に言う：私はすでに、二度と再び、過去も、現在も、未来も、経験しない。

というのも、私の心は、すでに、いかなる世間的相対的実相も、残留していないが故に。私はあなた方に、もはや（+心内に）、どのようなものも残してはいない事を、保証することができる。

これは仏世尊の法における、煩惱を滅する力である。

法は、心の中にあり、煩惱もまた、心の中にあって、法と敵対する。

我々は、まさにその真ん中に挟まれて、この衝突から生じる所の、善と悪の果報を、受け取っている。

これは、我々が心に属しているが如くであり、また、心もまた、我々に属しているようなものである。

法は我々を護持し、救済してくれる：

我々の敵、すなわち煩悩は、我々を圧迫し、鞭で打って、我々をそれに屈服させる。

二者は同じ場所——心——から生起する。

禪の修行を通して、法は、徐々に、十分な力を獲得して、内在する煩悩——最も粗いものから、最も微細なものまで——を攻撃して、打ち負かす——そして、その後に徹底的にそれを心の中から追い出す。

これが、我々が言う所の、煩悩によって生じる純大苦聚が滅せられた、のである。

苦の滅は、無上の快樂（＝楽しみ、喜び）の出現であり、すなわち、至高で無上なる法の生起であり、それは法の光明が、煩悩によって覆い隠されて、光を発することの出来ない場所において、発生する。

最近行った開示では、私は涙を流しながら、この重大な体験を思い出していた。

証悟が発生した時、私の心は、はっきりとそれを知ることができたが、最近の因と縁の変化によって、私はそれを公開して、検討する事にした。

法が己自身を顕現する時、その衝撃は、非常に強く、力があり、四方八方へと湧現し、それに触れる一切に、深々と影響を与えるが、それは心理的影響だけではなく、生理的影響までも及ぼす。

たとえば、涙が零れる。

法に接触した時、涙は強烈に流れ出てくる。

問題は、宇宙全体に存在する衆生は、煩悩によって、束縛されている事である。

答えて頂きたい：

この世界において、誰が、法の実相を見たことがあるか？誰一人としていない。

故に、アチャン・マハー・ブーフが公衆の面前で涙を流しているのを見たならば、彼らは吃驚してしまう：彼に何が起こったのか？

もし、彼が徹底的に煩悩を消滅させて、阿羅漢を証得したのであれば、なぜに、これほどひどく泣く事があるだろうか？

おお！見ましたか？

これらの人々は、阿羅漢の涙を誤解している。

あなた方は、理解できますか？

あなた方の内、人の身体の一つひとつの部分は、すべて世間的眞実である事を、理解している人はいますか？

それらは皆心と関連しているが、心もまた、それらに責任を負うものである。

ひとたび、心——それらの管理人——が崩壊したならば、その敵、この世間的眞実もまた、粉々に砕け散ってしまう。

その後、心は、心の純潔で清浄なる本性が、己自身のの本質に従って、大いなる光明を発するのである。

これがあの時の体験の一部分である。

もう一つ、別の面について：同一の時間において、共鳴と、強烈な生理的反応が生じて、身体が震える。

この震えは、故意であろうか？

違うのである。

それは、法が、煩惱を一撃に絶命しようとしていて、それに対して、永遠に心から離れるように迫る所の、抗う事のできない力によって生じる結果なのである。

この驚天動地の出来事は、強大な衝撃を齎す——宇宙全体が振動して、揺れる。

それは法と煩惱との永遠の分離であり、相対的実相の世界と、絶対的解脱の世界とが、最終的に分離した感覚なのである。

清浄なる法の本性は、それを体験する所の心の中において、その、無上の莊嚴さを、徹底的に顕現する。

心と密接な関連がある為、（五蘊の）身・心は、この震撼と、特殊な体験に対して、反応を生じせしめる。

心の真正なる本性は、永遠に存在しているが、しかし、以前とは異なった方式でもって、己自身を身・心において、展開し顕現する。

その以前、これまで有り得なかった体験が、強大な衝撃を齎した。身・心の蘊は世間的眞実であり、心が運用するために用いる道具である。

心が崩壊する時、<今・ここ>において顕現する所の、清浄なる本性は、完全に影響を受ける事のない状態を維持する：しかし、身・心の蘊——無常・苦・無我によって、厳しくコントロール（制御）されている蘊——は、強烈な影響を受ける。

影響から生じた反応は、蘊の内において生起しては、その後に消失る。

これは蘊の本質の無常性の反映である。

心の清浄なる本性は、生じることなく、滅することもない。

これが、二者の異なる点である。

その結果、阿羅漢の、純粹で清浄なる心は、我々が知っている所の、通常の、汚れていて、不浄なる人体と比較する事は、できなくなる。

一人の人間が、己自ら、この眞相を見たならば、たとえ、彼の目の前に仏がいたとしても、彼は、二度と仏に、証しを求める必要はなくなる。

この様な状況の下、彼は、ただ、仏に向って合掌して、善哉と叫ぶより、ない。

勝義諦が、個人の心内における自証であるため、彼は、外に向かって、証しを求めることはない。

これがいわゆる ” 無上で甚深なる法は、一切を超越している ” である。

これは、心中で生起する所の覚醒と、阿羅漢の清浄なる本質とは、同じものである事、世間的な無常・苦・無我の法則を、徹底的に超越した所の清浄であり、世間的な法は、これ以上は、それには適合されない、という事を示すものである。

蘊はその時、激しく震える。

たとえば、涙を流す等。

涙が流れる原因は、非常に多い：悲しみは涙を連れて来るし、楽しみも、然り。煙も涙を誘うし、タマネギも涙を誘う。

涙のために、なぜ、これほど大いに驚き、不思議がるのか？

畢竟、涙とは水である——それは、水大であり、色法の中の地、火、風と同じであり、水は、世間的眞実にしか、過ぎない。

突然、唐突にやってきた法の、清浄なる本性によって、強烈な振動が、起こった。

これらの色法は、みな刺激を受けて揺れ動いたが、清浄なる本性自身は、全くもって、影響を受けない。

蘊の本質は、不断に反応することであり、それらはよいもの、悪いもの、楽しいもの、痛苦のもの、悲しみと喜びによって、激動する。

それらは永遠に、この様に、また、あの様のと、激動させられる。

そしてその一刻において、それは、法の清浄なる本性によって、突然に出現し、励起する。

五蘊は阿羅漢ではなく：阿羅漢は五蘊ではない。

五蘊は絶対的に、かつ一つの例外もなく、ただの世間的眞実に過ぎない。

それに反して、清浄なる本性は、すでに完全に——100%——世間的眞実の、すべての痕跡から、解脱している。

故に、二者は、混同され得ないし、混同される事も無いし、（+双方がお互いに）完全に隔絶されているのである。

それらは、各々が、各々の場所において、相対的な反応を起すだけである。

清浄なる本性は、突然、己自ら、絶対的解脱の位置に踊り出る。

無始以来、どの様な時代であっても、すべての人間の五蘊は、この世間的眞実の上において、維持され続けてきた。

証悟の後、仏と阿羅漢は、五蘊の運用を停止するために、それらを破壊しようなどとは考えない。

たとえば、笑う事。

笑いは、五蘊の内の自然な作用の内の一つである。

ちょうど、涙を流すのと同じ様に。

この二者は、みな、五蘊がそれらの状況に合わせて、生じせしめる作用である。我々の身体が、適切な健康を保持している限り、それらは適合する作用を選択して、運用することができる。

たとえば、我々が、地でもって、レンガ、石灰、石、砂、鋼などの建材を造り出すように——これらが、地から来るのでなければ、一体、どこからやって来ると言うのであろうか？

我々が、これらの基礎的な建材を擁する時、我々は、どのようなものも建築することができる。

人々は一体どうしたのであろうか？

あなた方は、精神に異常を来したのであろうか？

それを私は聞きたい。

私は、法の名において批判されて、涙を流す。

しかし、あなた方の内、誰が、法の清浄なる本性を見ただろうか？

以前の私は、それを見たことがなかった。

私の先祖もまた、仏法を修行した事がなかったし、至高で無上なる法を見た事も無かった。

私は一人の修行僧であり、私は私の修行に乗っ取って、私があなた方に説明した所の方式に従って、一段、また一段と、不断に知識と智慧を証得して行ったのである。

私はこの様な修行方式によって、最後には、最高レベルの証悟を得ることができた。

今、この証悟は、それ自身の方式によって、己自身を顕現するのである。

あなた方の中に、至高で無上なる法を見ようとして、チャレンジした事のある人はいるのか？

それとも、あなた方全員は、盲目的に座り、目をきつく閉じて、大きな口を開けて、法に対して、野獣のような叫び声を上げるのか？

なぜ、あなた方は、己自身の首の頂点部分（＝頭）にある穢れに向かって、吠えないのか？

よく考えてみて！

その一塊の穢れは火である。

貪と、瞋と、痴（＝無知）が、その赤々と燃える大きな火のような穢れを作っていて、あなた方、一人ひとりの心が、汚染されている。

なぜ、あなた方は、己を顧みない？

法の殊勝なる本性を批判・評価したとて、何等の意味がある？

仏世尊は、我々以前に、この殊勝な境地に到達したが、もし、アチャン・マハー・ブーワの、仏陀の教法への理解が不正確であるならば、すべての声聞阿羅漢たちもまた、不正確という事になる。

しかし、実際は、あれら尊い阿羅漢たちは、永遠に尊敬するに値する。

あなた方は、なぜいまだに、己自身の心に、塵や穢れが充満している事に、気が付かないのか？

この種の、有害な自我（+意識）は、あなた方に墮落を齎す。

もし、あなた方が、これら汚染をうけた自我の弊害を見ることができないならば、あなた方は、法と衝突する事に、なるであろう。

法と衝突するという事は、石に向かって、刃物を振る事に似ているが、刃物で石に向かって行って、どうなると思うか？

あなたが、車を山に向かって、衝突させたならば、何が起こる？

怪我をするのは、誰であるか？

考えてみてごらん！

一桶の糞便が打撃を受ける。

殊勝なる者は、すでに世間を超越した故に、傷害を受けることはない。

仏教徒として、あなた方は、行為における一般的な準則を覚えておかねばならない——あなた方の穢れをもって、他人を汚してはならない。

なぜなら、その過程において、あなた方は、己自身を壊滅させることになるが故に。

この様にすることは、何等の利益も齎さない。

私の言う殊勝とは、どこから来るのか？

私はすでに、この点に関して、タイの国民の一人ひとりに示して見せた。

もし、あなた方が、理性を尊ぶ事を拒否するならば、あなた方は他に、何を受け取る事ができるだろうか？

今日の人々は、一体何を追求しているのであろうか？

私が探し求め、追い求め、かつその為に命まで捨てようとして（+得たものは）、今、慈悲の心をもって、弟子たちを教え導いている、無上の甚深なる法である。

私は我田引水、嘘をついて、喧伝をしているのではない。

嘘、悪毒の流言飛語、これらはすべて必要のないものであって、それらは、法の円満なる本性の上に、更に付け加えるべきものではない。

もし、円満なる本性に、なにも付け加える必要がないのであれば、なぜ ” 円満 ” と呼ばれるのか？

よく考えてみる事。

タイの仏教徒の態度は、非常に悪い。

私が一言何か言えば、全国各地の人々は、何事かを吠えはじめる。

可哀そうではある！

私は、あなた方に憐憫する。

これは、仏世尊が、世間がなぜこれほどまでに、無知であるのかと感嘆した時の感受であり、彼の両の目から涙が零れた——大悲の涙と、法の清浄さに驚嘆する涙である。

衆生が、これほどまでに盲目であるのを見る時、仏世尊はどれほどまでに悲しみ、彼らに法を教えたいとは思わなかった——人々は、なぜ、己自身の心内の穢れを意識しないのであろうか？

今日の状況も、あまり変わりはない。

人々が法を聞くとき、彼らは、己が傷ついた方式でもって、教師を批判し、教師を尊重しないし、最大の恭敬心でもって、貴重な教法を実践しようとはしない。

なぜ、彼らは己自ら変化して、何らかの利益を齎そうとはしないのか？

このことから、私はタイの仏教徒は、非常に愚かであると断定する。

アチャン・マハー・ブーワは、これまで動揺した事がない。

世界中の人間が吠えたとしても、私は私の心内の言葉を語るし、（+彼らからの）影響を、受けることはない。

法の清浄なる本性は、世間の一切によって、動揺することがない。

あれら、行為・行動の相応しくない人間は、相応しくないままに生きていく；

あれら、利益の損失に敏感な人間は、損失のために生きていく；

あれら、利益の受益に敏感な人間は、受益のために生きていく；

善行に影響を受けた人間は、善行に帰依する。

一人の人間は、善業によって、（+次の世に）生まれ変わる。

一人の人間が、悪行の影響を受けたならば、その人間の心は、猛火の中で生きていくことになる。

これは、あなた方の欲する生き方であるのか？

仏世尊の教えは、永遠に正しく、彼は大声で宣言した：

” 貪愛と無明が、世間に充満し、

炎の中で燃えているようだ。

嬉しいこと、楽しくて笑いに値するものなど、

どこにもない。

世間は暗黒によって覆い隠されているのに、

人はなぜ、光明を追い求める事をしないのか？”

よく聞くように！

私が教える法もまた同様である：

” 貪愛と無明・・・”

あなた方全員は、一体どのように精神を病んでいるのか。

仏世尊が：” 貪愛と無明・・・” と宣言する時、一群の酒鬼（＝よっぱらい）たちが話をするのが聞こえたそうだが、あなた方は、あれら酒鬼の後塵を、拝しているのだ。

仏陀が弘法する時、彼らは一群の酒鬼であって、聖賢たちではなかった。

この話は、経典にも載っている：仏世尊は、一群の酒鬼を比較してみて、彼らの違いを思惟してみた。

仏陀の叱咤を受けても、彼らは依然として、己自身の錯誤に気が付く事がない。

私が最近流した涙は、仏世尊と同じことを伝えている。

あなた方は、引き続きこれから先も、己自身の錯誤に気が付かないのであれば、一体どうなると思うか？

あなた方の心智は、酒鬼より劣っているというのだろうか？

墮落したくないのであれば、あなた方は、この問題について、己自身に自問しなければならぬ。

私は、己自身の最大の能力を発揮して、この社会に協力したいと思っている。

私の心の中には、勇敢とか、恐れとかの、感覚はない；いわゆる得失もなく、勝ち負けもなく、私があなた方を手助けする動機は、純粹に慈悲の心から来ている。

私が現在、あなた方に教えている所の、無上の甚深なる法を証悟する為に、私は一切を犠牲にしたが、その犠牲は、決して悪果を得るためではなかった。

求法の過程において、私はほぼ生命を犠牲にしかけたし、世間に対して、私が証得した所の法を宣揚することができるようになる以前、私は死のすぐ側にいたのである。

なぜ、それ（＝法）を受け取ろうとする人がいないのか？

今日のタイという国は、一体どうなってしまったのか？

この事を私は知りたいと思う。

一人の人間の、自我の思いが、強ければ強いほど、人は、ますます傲慢になる——最後には、彼らは、己自身が仏より偉い——至高で無上の導師より、なお己の方が、聡明なのだと思ってしまう。

この国の子・民は、これほど愚かになってしまった。

誰も法に関心を寄せない！

天は知っている。

これから先、多くの人々は、寺院に行かなくなるであろう事を。

彼らの、私の最近の弘法に対する反応を、みてみたまえ。

各種の風刺的な態度と、嘲笑があるが、これはまさに、煩惱が全面的に威力を發揮した状況なのである。

あの日、私が涙を流すのを見て、彼らは私を冷たく嘲笑した。

しかし、私はこのことによって動揺する事はない。

この国全体が、私を批判したとしても、私は誰とも喧嘩をしない。

私は純粹に慈悲の心から、人々を教導しているが、なぜ、彼らはそれを受け入れられないのであろうか？

タイの人々はそれほど愚かなのであろうか？

仏世尊の法は、この世間から、滅し去ったのか？

仏世尊の法は、その崇高な地位を、失ってしまったのか？

あれら修行者たち——仏陀の教法に従って、その結果、証悟した人たちは、虚妄の神、または人々の敵と、見做されるようになったのか？

どのようであれ、私は誰にも、腹を立てる事はない。

私の話し方に、強烈な評論を含まれるのは、法の力から、来ている。

法は、動揺することがない。

法は、如何なる人にも怒らないし、恨んだりはしない。

しかし、法は、永遠に力強く満たされた力で以て、己自身を顕現する。

煩惱は、このように言う事も出来る：

彼らもまた、己自身に擁する力で以て、己自身を顕現する、と。

煩惱の力は、世間に恐ろしい破壊を齎すが、法の力は、水のように、それは世間の火を鎮め、清涼にする。

あなた方は、私が、怒りにまかせて話をしていると思うのか？

憤怒はどこから来ると思うのか？

憤怒は、煩惱からやって来る。

一人の、すでに煩惱から徹底的に解脱した人間から言えば、あなたは、彼を怒らせることはできない。

信じられないのであれば、あなた方は試してみてもよい。

彼の心内には、すでに、根本的に恨み・憤怒というものがない。

もし、少しでも恨み・憤怒があるというのであれば、彼は、煩惱を解脱した阿羅漢である、と言われることはない。

というのも、貪、瞋、痴（＝無知）は、煩惱であるが故に。

理解できますか？

上記の事柄をよく考えたならば、あなた方は（＋真理を）理解する事ができるに違いない。

この色身は、完全に世間的事実である。

もし、心の清浄なる本性と、直接関係を保てるならば、色身は清浄なる心の影響を受けるが、これが自然というものである。



付録：心——意識の知るという根本的特性

以下は、アチャン・マハー・ブーフの、幾つかの異なる開示の中から採録した所の、心の特性に関する評論である。

最も重要なのは心である

意識の、知る、という根本的特性、それは、純粹かつ清浄の、簡単な覚知によって構成されている——心は、ただ、知る、のである。善と悪の覚知、及び、随時に行っている所の判断は、心の活動による。ある時には、ある種の活動は念として顕示され；ある別の時には、智慧であったりする。しかし、真正なる心は、完全に、活動またはいかなる状態をも、顕示する事が無い。それは、ただ、知る、のである。故に、心から発する所の活動、たとえば、善と悪と、楽と苦、毀誉褒貶の覚知は、すべて、心から流れ出る所の意識状態に過ぎない。

それは、心の活動と状態を代表しているものの、この類の意識の本質は、不断に生起し、また滅しさるものであって、終始、不安定の中にある。それゆえに、それは、頼りにならないものなのである。

現象の生・滅を、認知することの出来るのは、識（*viññāṇa*）である。たとえば、識は、（+以下のものを）認知すると同時に、色、声（音）、香、味、触が、目、耳、鼻、舌、身体に接触した時に生じる影像・イメージを記録する。一つひとつの外塵と、それに相応する所の内根とが接触すると同時に、それと相応する所の識が生じ、また記録さ

れ、かつ、接触が終了する時には、それは、同時に滅するのである。識は、それゆえに、心の一つの状態であると言える。行または思想（＝考える事）と想像は、心の、もう一つ別の状態である。ひとたび、心が、これらの状態に対して反応すると、それらは、止まることなく増長する。また、もし、なんらの状態も生起しないならば、心本来の機能——知る——が突出してくる。

とはいえ、一般の凡夫の、能知（＝知る、知る者）の心と、阿羅漢の、知る、という心は、完全に異なっている。凡夫の能知の特性は、内部において汚染されている。漏尽者としての阿羅漢は、すでに、一切の汚染から解脱しており、彼らの、知る、は純粹で、清浄で、簡単な覚知であり、汚染されていない。純粹で清浄な覚知は、何物にも汚染しておらず、無上の覚知は、円満と楽しさを、齎すものである。真正なる殊勝なく知るは、阿羅漢の徹底した清浄なる境地と相応する。この無上なる楽しみは、恒常であって不変であり、世間が常に無常・苦・無我によって結縛される所の、有為法のように、変化しない。この種の世間法は、根本的に、すでに徹底的に清浄なる人の心に入することはできない。

心は、輪廻を構成する、真正なる根本である。それは、有情が不断に輪廻する所の、本質である。心は、輪廻の扇動者であり、また、生死を相続せしめ、（＋我々をして）流転せしめる、主要な駆動者でもある。輪廻して、不断に流転するというのは、有情が不可避免的に業力の支配を受けて、不断に生死して止まない為である。心は、業力に支配されるが故に、業力に使役されて、恒常に流転して、生死する。心が継続して業力の統治をうけている限り、状況は各の如くであって、変わる訳がない。唯一の例外は、阿羅漢の心であって、彼の心は、完全に業力の主宰を超越しており、同時に、彼は、徹底的に、一切の世間的相対を、超越している。いかなる世間法も、阿羅漢の心を、干渉する事は出来ない。

阿羅漢の境地において、心は、一切から出離している。ひとたび、心が徹底的に清浄である時、それは、唯一、己自身に内在する所の、本性によってのみ覚知するようになる。ここにおいて、心は、それ自身における最高の境地を証得する事が出来るのであるが、それは、この絶対純粹、清浄なる境地において、円満に証得するものである。この境地において、一期の生命が、もう一つ別の一期の生命へと、引き継がれていく所の輪廻は、止息する。この境地においては、あの止まることを知らないかの如くに、高レベルの生命から、低レベルへの生命へと墮落して、また再び上昇し、不断に生、老、病、死を遍歴する所の輪廻は、止息する。

なぜ、この境地において、輪廻が止息するのか？それは、通常、人の心に浸透していて、それを不断に輪廻せしめる所の、覆い隠された雑染による因・縁をば、すでに徹底的に滅し去った為に、後に残ったのは、純粹で清浄なる、二度と再び、生死を遍歴しない心であるが故である。もし、心が、いまだこのレベルに到達しないのであれば、輪廻は避ける事ができない。ある種の人々は、死後の輪廻を否定し、またある種の人々は、頑迷にも虚無主義を主張して、死後、生命が継続する可能性を否定する。しかし、信仰は、事実を変えることはできない。一人の人間の意識における、知る、という根本的特性は、推測に主宰される事はなく、また、個人の観点や意見によって、影響を受けることもない。

それは一つの、己自身に内在する最も主要な主宰者であり、無上の権威である所の業力と連合して、一切の推測を退ける。結果、一切の有情は、一期の生命から、もう一つ別の一期の生命に向かうべく圧迫され、粗いもの、たとえば、陸上の、海の、水の中の生命を遍歴する；微細なものでは、餓鬼、天、梵の生命がある。後者は非常に微細であって、人の肉眼で見ることが出来ないものであるが、心は、まったくの困難もなく、これらの道に生まれることができる。その時、必要なものは、唯一、相応する業だけ、なのである。業力は、決定的要素であり、それは心をして、輪廻の内に、止まる事を知らぬように流転せしめるのである。

心は極端なほど微細である。その為に、それがどのような構造になっているのかを、明確にする事を、難しくさせている。唯一、心が、ある一定のレベルの禪定を証得する時のみ、その本質は突出する。経験のある禅者であっても、心の本質を理解するのは難しい、彼がサマーディを証得しているのでなければ。心は身体の中に安住してはいるものの、しかし、私はそれを偵察して見つけ出す事は困難である。

それはそれ程までに微細なのである。それは、全身に遍布しており、我々は、この部分が真正なる心であるとか、あの部分が真正なる心であるとかを言えない。それは微細すぎて、禪の修行を實踐する事によってしか、それを察知する事ができない。禪の修行を通して、我々は心を分離する能力を身に着ける事によって、身体と心は、異なる存在である事が分かるようになる。これはあるレベルにおける分離であるが、心はサマーディのレベルにおいて、この事が成し遂げられるが、サマーディの状態の内においてしか、成功しない。

もう一つ別のレベルでは、心は、身体から完全に分離することができるが、しかし、いまだ受、想、行と識の、これら個人的な心理作用の内から、分離する事はできない。心の、このレベルにおいては、我々は、智慧でもって、それを身体から分離する事はで

きるし、かつ、最後には永遠に、身体は ”私” ”私のもの” であるなどと、信じる事はなくなる。しかし、それでもなお、この段階では、心を、受想行識の作用から、分離する事は出来得ない。継続的に智慧でもって、分別、区別するならば、心は最終的に、これらの心の作用から分離することが出来、その時において、明確に証することができる——現証——五蘊と心は、異なっているという事実を。これが、第三番目のレベルである。

最後のレベルになると、我々は、虚妄なる一切の根本的原因に專注する、すなわち、あの極端に微細で、（+心に）浸透する所の、無明である。我々は、無明というこの詞を知っているだけであって、それが心の中に覆い隠されている事を、察知することができない。実際、それが心内に浸透している様は、無色無味の毒薬のようで、我々には見ることができないが、しかし、それは確実にそこにある。この段階において、我々は、高く深い念力（=サティの力）、智慧、精進によって、この毒を取り出さなければならない。最後には、全面的に發揮された所の、念力と智慧でもって、無明でさえも、心から分離することができる。

心に浸透した一切、すべてのものが取り去られた後、我々は、最終的な境地を証得することができる。このレベルにおける分離は、永恆のものであって、それは徹底的な離脱であり、二度と再び努力する必要はなくなる。これが心の真正なる自由である。身体が病を得る時、我々はこれは、物質的元素が影響を受けたのだという事を知っているが故に、病状によって干渉されたり、気落ちしたりしない。

通常の状態においては、身体の不適は、心理的な不安を齎すが、ひとたび、心が真正に自由である時、身体が極めて痛苦であったとしても、心は依然として、無上の喜悦を保持することができる。身体と疼痛と心は、異なる現象であり、故に、心は、痛苦に悩まされることがない。まったくの猶予もなく、捨棄された後において、身体と感受は、二度と再び混同される事はない。これが、心の絶対解脱である。

心の内在は光明であり清浄である

それはあらゆるもの、物事との接触を、保ち続けている。一切の有為法は、例外なく無常・苦・無我の法則の制限、影響を受けているが、唯一、心の本性は、この制限を受けない。心が、無常・苦・無我の制限、影響を受けるのは、この法則が制限する所の法によって、心が汚染される為であり、その事によって、心もまた、それと共に、流転することになった。

心は、有為法と一体化するが、しかし、それは分解したり、崩壊したりはしない。それは、あれらの、それに影響を与える所の力に影響されて流転するが、その事によって、また流転する。しかし、心の本性の真正なる力、それはすなわち、知る、であるが、それは死ぬということがない。この不死の本性は、分解や破壊を、超えている。分解や破壊を超越しているが故に、それは無常・苦・無我という、この自然現象からも、超越している。しかし、我々はこの事に関して、蒙昧として無知である。というのも、心を汚染する所の有為法は、完全に心に絡み付いて、心の本性は、それらに主導されているからである。生と死は、心が煩惱に汚染され続けている状態であると言える。

しかし、煩惱自体が、我々の無知の原因であり、その為に、我々はこの事実を察知することができないでいる。生と死は、煩惱が齎す問題である。しかしながら、我々の本当の問題、唯一の根本的問題——心の最も根本的問題でもあるが——は、我々に、真正な己自身になるための力に欠けている事にある。我々は却って、嘘のものを、我々の真正なる自己と思こんでいるのであるが、このことによって、心は、己自身の本性と真正に一致する事が無い。

更にひどいのは、心は、煩惱の詐欺に振り回されて、一切の事柄に、憂慮と恐怖を持ち込んだことである。それは生存を恐れ、死を恐れ、どんな事柄であっても——少しの痛み、劇的な痛み——を恐怖した。最も微小で、取るに足りない干渉であっても、不安を齎すのである。その結果、心は、長期的に憂慮と恐怖に満たされるようになった。恐怖と憂慮は、心の一部分ではないのではあるが、しかし、それは、心に干渉する能力を持っているのである。

心がすでに浄化されて、一切の干渉から徹底的に清浄かつ自由になった時にだけ、我々は、一粒の、一切の恐怖から自由になった心を見ることが出来る。その後において、恐怖もなく、勇気もなく、残るのは唯一、心の真正なる本性であり、それは自然に独存し、時間と空間から永遠に独立する。それだけが存在している。その他のものは存在しない。これこそが真正なる心である。”真正なる心”は、阿羅漢の絶対的清浄、有余涅槃のみを指すが、その他のもので、”真正なる心”と呼べるものは無い。この詞を他のものに被せたならば、私は慙愧を覚えるものである。”本来の心”とは、無尽に生死流転する所の心の本性を指す。

仏陀が ”比丘たちよ！本来の心の内在は、光明であり、徹底的清らかである。しかし、それがそれにクロスする煩惱と混同される事によって、汚染を受けるのである。”と述べる時、すなわち、この事を言うのである。この観点から言えば、”本来の心”は、世俗諦の本来を言い、絶対清浄なる本来ではない。本来の心に関して、仏陀は言う

” 比丘たちよ！本来の心は、明るい (Pabhassaramidaṃ cittaṃ bhikkhave) 。”

Pabhassara とは、明るく光るという事であり、清浄を意味しない。彼の理由は絶対的に正しく、反駁の余地はない。もし、仏陀が本来の心を、清浄なる心であると規定するならば、人々は即刻反論することができる：“もし、心が本来清浄であるならば、それはなぜ、再生することがあるのか？”と。

阿羅漢の心は、すでに清浄である。それならば、彼は、心を更に清浄にする必要はないではないか？

これは明確な異議である——それを清浄にしなければならない理由とは、何か？

反対に、光明の心は、清浄にされる事ができる。

というのも、その光明は、無明の核心的本質であるが故に。心が、この光明を超越して、絶対的解脱に到達した時、禪者は、己自ら真相を理解することができる。その後にあるのは、あの光明は二度と心に顕現することはない。このようであって初めて、彼は真正に最終的な実相に覚醒したのだと言える。

ひとたび心が十分に浄化されたならば・・・

それは光明で清らかであり続ける。その後、我々は静かな場所で、安寧と静けさに囲まれる時——静かな深夜のような時——その時、心がたとえサマーディの境地に入っていなくとも、それが覚知する所の焦点は、かくも殊勝で、微妙で表現しがたいほどである。この微細な覚知は、光明となって顕現し、我々の周囲において、あらゆる方面に照射する。この時、心は、サマーディには入っていないものの、しかし、我々は色、声（音）、香、味と触を意識することがない。

実際、それは、まさに己自身の堅固な基礎を体験しているのである。心の根本は、すでに十分に浄化されたので、残されたのは、人を惑わす、壮麗な能知が最も突出した特徴そのものであった。この種の絶対的微妙なる覚知は、独立して身体外部に存在しているように、完全に心から突出して顕現する。

この段階においては、心の微細さと、顕示された所の本質から、能知の特性は完全に主導の地位を確保した。この時、いかなる映像・イメージも出現する事はない。唯一覚知のみが、独自に突出して顕現してくるのである。これが心の一側面である。この十分に浄化された心が禪定に入る時、また別の一側面——どのような思惟も、想像もない——を見ることができる。一切の活動、一切の行為は停止しており、それは暫くの間、安

止する。心の内において、一切の思惟と一切の想像は全面的に停止するが、これを称して ” 心は完全なる定の境地に入った ” と言う。

ここにおいては、唯一、心の 知る という根本的特性のみが、いまだ保たれていて、この微細な覚知以外——ほぼ、法界全体を包み込んで——絶対的に他のものは含まない。レーザーは、照射の範囲に制限があつて、その強度に従って近くまたは遠くを照らせるだけであるのに反して、心流は制限がなく、” 近く ” とか ” 遠く ” とかもない。たとえば、電燈の光の強弱は、そのワット数によるのであるが、ワット数が強ければ強いほど、遠くを照らす事ができ、ワット数が低い時は、近くしか照らせない。

しかし、心の流れは、これとは非常に異なっていて、距離は要因にはならない。精確に言えば、心は時間と空間の制限を超越していて、すべてに及ぶことができる。遠くても近くても、空間の概念がここでは用をたさないのである。唯一顕現する所の微細な覚知は、宇宙全体の一切に満ち満ちており、世界全体は、この覚知の微細な特質で充滿しており、その他のものは、ほぼ存在していないかのようである。

世界の一切は、すべて今まで通りに存在しているのではあるが、この已に障碍と障害物を滅し去った心の流れは、一切を包み込むようにすべてに及ぶのである。これが心の真正なる力である。絶対的に清浄なる心は、更に描写がしにくい。それは、説明できる範囲を超えている為に、私はどのようにそれを表現していいのか、分からないでいる。それはすでに世間的相ではないために、一般的な世間の事物のように、説明することができない。それは唯一、一切の世俗諦を超越し、己自ら勝義諦を証悟した者の領域であり、故に言語・文字では、それを描写することができないのである。

なぜ我々は” 世俗 ” の心と” 絶対解脱 ” の心に分けるのか？

それらの心は、(十二つの) 異なる心であろうか？

そうではない。それらは同じ一つの心である。

世俗的な真実から言えば、たとえば、煩惱と漏が、それをコントロール (制御) する時、これが心の一つの状態である。智慧の機能が、この状況を浄化して、それを徹底的に崩壊して分解したならば、あの、試練に負けない、真正なる心、真正なる法は、それと共に崩壊して消失するという事はない。

ただ、あの心に浸透した所の無常・苦・無我の状態だけが消失するのである。煩惱がどれほど微細であろうとも、それは依然として、無常・苦・無我によって支配されている。故に、必然的にそれは世間的な相となる。ひとたび、それが徹底的に崩壊したなら

ば、あの真正なる心、世俗諦を超越する所の心は、全面的に展開し、顕現する。これを心の絶対的解脱といい、または、心の絶対的清浄と言う。一切の、直前にあった、心との連携は、すでに永遠に切断されて、いまはただ、絶対的な清浄があるのみである。心の知る という根本的特性は、己自身の単独で存在している。

我々は、この知る という根本的特性が、身体のだこかの部位に集中しているのだ、とは言えない。それ以前の、世俗の心は、一つの明確な点を形成していて、我々はそれを見る事が出来たし、知ることもできた。たとえば、サマーディにおいては、我々はそれが胸にある事を知る事ができる。というのも、能知の特性が、非常に明確にそこに存在している事を、覚知する事が出来るからである。平静で、明るく、光り輝いており、その一点において、目を引くように顕示される為、我々は己自身で見ることができる。

故に、禪定によって、基本的なサマーディに入る事のできる禪修行者は、みな、”能知”の中心は、胸にある事を、明確に知っている。彼らは、それが脳内にあるなどとは言わない。そういう間違いは、あれら、サマーディの体験のない人間が言うのである。しかし、この同じ心が、徹底的に浄化されたならば、あの中心は消えてしまう。我々はこの時、心は上にあるとか、下にあるとか、または身体のだこその部位に安住しているとかは、言わない。

今、それは純粹で浄化された覚知であり、一つのそれほど微細で精緻な覚知は、世俗が言う所の ”知る” という、一切の特性を超越している。我々が ”特別に精緻” と言うのは、世間的な言語でもって、その真実を表現できないが為であるが、絶対的精緻と言う言い方もまた、相対的なものに過ぎないのである。この微細な覚知は、一つの点、または一つの中心を持たないために、どこかの部位に安住することはない。

それはただ、知る という根本的特性であり、絶対的に何か浸透している事はない。これらの蘊は、(+証悟する)以前の心と混じり合っていた時と同じように、それは依然として蘊の中に存在しているが、しかし、今の心は、それらと同じいかなる性質も擁しておらず、それは二つの異なる世界なのである。このような状態に至った時にのみ、我々は身体と、蘊と心は、完全に異なったものであり、分解されたものである、という実相を、明確に知る事が出来るのである。(翻訳終了)

